連句

猫蓑作品集Ⅷ

序

「猫蓑作品集Ⅷ」は平成九年十一月、投稿された作品六十七篇を収録している。

歌仙が三十一巻、源心二巻と、それぞれ昨年より減少している反面、二十韻十八巻、胡蝶一巻、百韻二巻、半歌仙十二巻、そして三っ物一巻とみな昨年より増加しているのは頼もしい。

この作品集は国会図書館その他、大学の図書館、公共図書館にも寄贈しているから、連句作者としての自分の名を後世に伝えることができる最良のものである事をよく認識して自信のある作品を、積極的に投稿して欲しい。

さらに、連句作品の批評・鑑賞の方法に関する座談会、これも昨年に引き続き挙行し、その概要を掲載する事が出来た。今年は殊に若い連句理論家を招待したため、い

ろいろ新しい意見を聞くことが出来、大いに有益であった。

これはこの難しい座談会を司会し、かつ速記された式田さんの力によるもので、ここに謝意を表するとともに、皆さんにも熟読玩味していただきたいと思う次第である。

平成十年二月十三日　　東　明雅

目次

序……東　明雅
膝送り　秋風や……東　明雅　加朱　6
合評……東　明雅・中尾青宵　8
―連句批評と鑑賞の方法―
浅沼　璞・辻　杏奈
二上貴夫・佛渕健悟
司会・文責　式田和子
歳旦三ツ物・鳥雲に……秋元　正江　22
歌仙
黄梅……市野沢　弘子　捌　24
象牙のファラオ……稲垣　渥子　捌　26
数へ日の……岩井　啓子　捌　28
神の旅……両吟　水壺・路子　30
秋惜しむ……内田　麻子　捌　32
雁一羽……梅田　利子　捌　34
初紅葉……大窪　瑞枝　捌　36
山笑ふ……金久保　淑子　捌　38
天覧や……神谷　安子　捌　40
梅雨の薔薇……桑原　美津　捌　42
オリンポスの果実……米谷　貞子　捌　44
初時雨……近藤　守男　捌　46
黒き扉……坂本　孝子　捌　48
時雨るるや……式田　和子　捌　50
黄河中州……副島　久美子　捌　52
後の月……染谷　佳之子　捌　54
石のこゑ……椿　紀子　捌　56
木香バラ……長崎　和代　捌　58
流し南風……中島　啓世　捌　60
佃煮を……中田　あかり　捌　62

沖南風……橋野代々子 捌 64
玉蟲乾ぶ……八角澄子 捌 66
三伏……原田千町 捌 68
曼珠沙華……日高英二 捌 70
物すごく……佛渕健悟 捌 72
新涼や……本田弥生 捌 74
適塾……本屋良子 捌 76
ころも祭……矢崎藍 捌 78
秋桜……山口美恵 捌 80
鷗外忌……山口みづゑ 捌 82
炎帝……吉村ゑみこ 捌 84
源心
萩こぼる……木村真呂 捌 88
梅雨雷……佐古英子 捌 90
二十韻
溢蚊……青木秀樹 捌 94
微笑佛……秋山志世子 捌 96
銀杏……生田目常義 捌 98
島の月……久保田庸子 捌 100
作り滝……上月淳子 捌 102
寒夜かな……五味蓉子 捌 104
冬浅き頃……杉山壽子 捌 106
頭陀の袋……文音・淑代・千恵子 108
氷屋……鈴木美奈子 捌 110
吊ランプ……下鉢清子 捌 112
きざはしや……武村利子 捌 114
鎌倉や……東郁子 捌 116
河童忌……日高玲 捌 118
大枯野……百武冬乃 捌 120
頬髭に……峯田政志 捌 122
ななかまど……八代嫋 捌 124
清洲橋……山崎一恵 捌 126

雀の色……和田順子捌 128
半歌仙
時鳥……加藤治子捌 132
梅擬……くのあや捌 134
挙母の里……小園好捌 136
秩父なり……権頭和弥捌 138
十夜寺……佐々木有子捌 140
山姥……篠原達子捌 142
衣更へて……島村暁巳捌 144
藪椿……須田智恵捌 146
石神井……両吟 水壺・かりん 148
こでまりや……松本碧捌 150
団栗……宮川侊子捌 152
聖夜……由川慶子捌 154
胡蝶
みんみんや……両吟 健悟・淑代 156

百韻
若葉風……倉本路子捌 160
風もちて……橘文子捌 163
あとがき……下鉢清子 167

＊
＊
＊

膝送り　秋風や

東　明雅　加朱

秋風や耳に掌当つる翁ぶり　今宮水壺
川に向ひて月を待つ席　東明雅
水彩画紅葉の色鮮やかに　橘文子
犬をぐるりと囲む学童　日高玲雅
ラッセル車深雪の駅に停められて　壺
毛皮の人に莨火を借る　玲
総(ウ)稽古くりかへし振る頭出し　子
行の間にやたら書きこみ　壺
状差しに文ふるびたる山の宿　雅
男とみれば親切な女医　子
胸の奥濡らして甘き酒を受け　玲
遠ざかりゆく海鞘の後味　雅
東海の小島の磯の蟹の月　壺
預金の額は0のまた0　玲
黙礼のあとは小声で口籠り　子
猟の名残に集ふ若者　壺
花ふぶきマジシャン帽を一ふりに　雅
タンゴ踊れば募る春愁

羽(ナオ)ばたきて南半球目の下に　子
　予言のままに生まる英雄　玲
生涯を賭けてル・マンに散りし人　雅
　輪転機てふもののひまなき　壺
豆腐屋の越後訛りの笛を聞く　玲
　いびつな茶碗毀つ陶工　子
金婚のいたはり合うて着ぶくれて　壺
　ダーリンと呼び宿六と呼び　雅
株保険銀行までも冷えまさり　文
　真如の月の照らす戒壇　玲
露霜のわが来し方をふりかへる　雅
　さはさりながら憎き碁仇　壺
尺蠖(ナウ)の計りかねたる虚言癖　玲
　ETの夢破るもののけ　子
現世はスクランブルのまんげ鏡　壺
　鶯餅を買ひ帰るなり　雅
ずいいーと立机披露の花霞　文
　佐保姫の衣しつけ引きぬく　玲

平成九年十一月二日　首尾

合評

連句批評と鑑賞の方法

出席者
東　明雅・中尾　青宵・浅沼　璞
辻　杏奈・二上　貴夫・佛渕　健悟
（順不同）

司会・文責
式田　和子

平成九年十二月六日
於　原宿　水交会

司会　本日はお忙しいところご出席いただきありがとうございました。私ども猫蓑会の会員の作品集には例年巻頭に諸先生方の合評を掲載しておりますので、お願い申上ました。

テーマとして、「連句批評と鑑賞の方法」を取り上げております。叩き台といたしまして、作品をお送りしてございますが、連句の鑑賞はどうしても一句一句の付け合いに片寄りがちでございますので、今回は新進気鋭の先生方をお願いして、大つかみな言い方ですが、一巻そのものに対する鑑賞の方法などをお話しいただければ幸と存じます。それでは明雅先生どうぞ。

明雅　連句の鑑賞と批評の根本原則をたてたいと思って、昨年もお集りいただいたのですが、その時は作品の一句一句のよしあしの論に終始して、一巻全体の鑑賞と批評のいわば基準というものを考えるには到りませんでした。今年はその点をよろしくお願いします。

批評について

明雅　一巻を読むのにどういう点に重点を置いたらいいか、実は国民文化祭の選をして、作品を選ぶ基準は何かを考えてしまうからです。選は難かしいですね。

司会　一つ二つの傷があっても、全体でよければよい作品となるのか、また別の考え方もあると思いますが。

明雅　まず一巻に序・破・急があればいいと思うのですが、いまはそれがない作品が多い。

青宵　出来上った作品は良いといってみても悪いといってみても難かしい問題です。選には絶対性とか客観性とか

ないので難かしい。自分の仲間との間で分かり合い愉しむのが連句の座です。他門のものを読むときや別座のものに目がふれたときに感じることと、自分（達）の作を見るのとは読み方や感じ方が違います。

批評することは、選をすることや、けなしたり表彰することと繋ります。それが連句の本質の在り方に抵触するのではないかということです。協会で年鑑に載っているものに賞を出すことは私は反対で、今年から止めてもらいました。たしかに世間では文学にもある程度の表彰制度があるようですが、連句は自分の感性でやり、自分達の楽しみでやる。他人に分ってもらったり褒めてもらったりすることは二の次のことでしょう。その、一・二の順が逆になるのが問題です。選挙も、最後は鉛筆を転がして順位付するようなところがあります。国民文化祭などはお祭りで、その賞は必要悪。お笑い位に割り切り世間のならはしとしてつき合っていけばいいと思います。

司会　総論賛成。各論についてはいろいろな考え方があると思います。浅沼先生、いかがですか。

璞　賞を出すことはナンセンスです。連句を巻くということが批評そのものです。作っていくこと自体、前句に対する批評になっているわけですから、一句一句つけていくことが批評ではないですか。批評の固まりを更に作品として批評するのは過剰行為ではないですか。

連句の構造そのものに興味を持ったので、連句批評を始めたのですが、連句作品は一座のものですから、一句一句の批評は実作者としてその巻にもぐり込むこと、かかわることになるわけです。俳句は句集一冊として出来上ったテキストだが、座は付合の合評会になるわけで、それを更に批評するのは自己矛盾を感じます。

健悟　私達の仲間でも読み捨てではない、あるいは自分達の作品が活字になってそれでおしまいというのではなく、批評活動がもっとあっていいのでは、ということが話題になります。

連句賞については、これに目を奪われるのはつまりませんが、私自身はあっても構わないと思っています。但し、選考過程をもっとオープンにしていただくと、連句鑑賞が身近になるかと思います。

司会　私たちが一巻を読んで、いいものとそうでないものを感じますが、杏奈さんいかがですか。

式目について

杏奈　私は連句というものをパソコン通信で初めて知りました。パソコン通信で連句を取り入れたのはコミュニケ

ーションの手段としてでした。必ず前句に付けるわけですから、コミュニケーションがよりスムーズにいくわけです。手段として始められたのですが、やってみると意外に面白いことがわかって、パソコン連句（私たちは電脳連句と言ってます）は今でも続いています。初めは式目も何もなくてただ、前の人の句に触発された感情なりに、事柄を付けるだけでしたが、だんだん、式目を知るようになって、歌仙も巻くようになってきました。

電脳連句は、ちょうど座と文音の中間みたいなものでしょうか。仮想の座ですね。出がちでも膝送りでもできますし、それぞれがパソコン通信にアクセスしてリアルタイムでやることもできます。家にいながら座にも参加できるという意味で新らしい形式になるかもしれません。

浅沼先生の連句そのものが批評だというご意見を聞いてなるほどと思いました。確かに数ある句の中から一つが選ばれるわけですから既に批評されているわけですね。私はまだ連句の経験が浅いので立派なことは言えないんですが、読んで引き込まれる一巻と、引き込まれない一巻があります。日常生活の句ばかり続いている巻だと面白くない。自分の感性に合う句があるとうれしくなります。そういう句が出るとまたすぐ付けたくもなります。

青宵　感性に合う句が出されると、どんどん付けてやりたくなる。それが連句の醍醐味でしょう。

司会　そのことで、走りすぎることの抑制として式目があるのではないかとも考えられますが。

璞　表六句はストイック。それを破るために裏へ入りますが、「序破急」とは何なんでしょう。先生教えて下さいませんか。

明雅　今は序破急はいらないという人があるが、すくなくとも歌仙三十六句では、その一巻の中に緩急・静動の変化がないとつまらない。芭蕉も一巻同じ調子ではみっともないではないかといっています。序破急は舞楽などから来た言葉です。この破が問題にされますが、ウラ（破の一段）とナオ（破の二段）とはうんと違っています。終りが急なのだから、破の二つを一緒に考えるとそういう疑問が出て来るのでしょう。

青宵　先生は歌仙を考えておられるのでしょう。例えば百韻などでは序破急はつけられないのではありませんか。表六句の重さとテンポが序というなら歌仙は自然にそうなる。

璞　今月の連句協会報に、暉峻桐雨先生の「連句の序破急説と標記は古すぎる」というエッセイが載っています。「連歌時代の標記は今の人には懐紙をみたこともないから意味がわからない。舞楽の三拍子を四面の歌仙にあて

はめるのは無理。有名無実の懐紙と不合理な序破急説と離別しない限り、連俳の未来は暗いと思ったので、ストンと若い連衆の腑に落ちるセオリーとして、漢詩の『起承転結』が最適ではないかと思い、それを今後つかう」という主旨ですが、連句は必ず三句で転じるから、起承転結は成立しないのでは。

明雅　漢詩は一首一首にテーマがあるから起承転結は自ら必要ですが、連句一巻にはテーマがないのであるから、起承転結をあてはめるのは無理でしょう。

璞　はい。起承転結が疑問なのは、連句は完結を拒否するもの。自己矛盾の何ものでもありません。

健悟　先程青宵さんは「挙句で終りではなく、更にそこから発展していく連句」ということをおっしゃいましたが、マラソンの四二、一九五キロじゃないですが、ゴールに入って着た時は全部のエネルギーを燃焼させているという。そういう力の配分としての挙句ではないですか。

青宵　歌仙をやりましょうといってやれば先に形式が決っているから、必ず挙句で終らせますし、何か祝賀の興行では匂いの花も目出度くしたり、巻末をめでたく挙げるのは自然です。しかし、挙句といえど連句の平句ですからその挙句に興がのったら付けられるし、いくらでものばしうるというのが連句の本質で、形式を壊しても連句は連句です。

杏奈　一巻にユーモアのある句がないとつまらないです。ユーモアも差別的なものでなく思わずにんまりしてしまうような句が好きです。

明雅　そうですね。いまの連句はそのようなユーモアも欠けていますね。

璞　ユーモアといえば、この作品の〝尺蠖虫〟と〝ものの け〟〝ET〟あたりはよくついているし、転じもよく、ユーモアもあります。挙句がいいですね。

杏奈　挙句が面白いと思いました。前句のずいいーっについています。

璞　この巻はナウに入ってよくなった気がします。

杏奈　ということは前方の句は？

璞　春、花の句に佐保姫、古典の下敷もあって面白かった。ずいーっとしつけ糸の付合も。

杏奈　しつけ糸は引くのですか。

司会　そうです。とるともいいます。

青宵　前句立机披露で、付句。今までやんちゃ娘も一本立させて、というので、衣のしつけを引き抜くと見て、良い付です。

璞　連句の面白いのは多義的だからです。（一つの言葉が多くの意味を持つこと）付け方として一義性をとるか、

多義的なものがいいととるか。現代人の連句として考えるべき問題です。

青宵　解は個人々々多義だが、その中である筋の糸を辿って個人と座の共通の世界になる。

司会　それが入り混っているから連句は面白いのではありませんか。

青宵　批評が出来るということは、自分の中に確立したものがないと本来は出来ないことです。

司会　俳句一句に対してもまったく違った批評がありますね。読み方の違いでしょうか。

璞　連句も同じで、親句疎句があります。あまり親句ばかりでもつまらない。作品でいうと、ウの六句目「遠ざかりゆく」と。蟹の句（七句目）とは親句で、八句目の預金の額の付けは疎句でこれは面白いではないですか。この行間にはいろいろな事がつまっていて面白い。

つけ味について

明雅　作品に入りましたので、つけ味について伺いたい。というのは、近頃は空撓（そらだめ）の付けが多い。空撓も続くとちょっと…と思います。親句で付けていって、空撓は一巻に二句か三句。そこを盛上げて山を作るのがいいのではないでしょうか。

杏奈　付いていないのが並んでいると、読む方はしんどいです。

青宵　連句は添うことが第一。下手にムリした離れは要らない。それは捌く方も読む者も暗黙の期待です。それがどれ程の期待を超えているかということ。とにかく前の句を大切にすること。没念して時間をかけても舌頭千転して味わう。そうすると自然に付く。他のことは不要だ。それ以外のことを考えて付けると連句はそらぞらしいものになってしまいます。

明雅　その通りと思います。それが「連衆心」というもので、席を盛り上げていこうという心ですね。ところが今は前句への付味などかまわずに奇矯な句を出して驚かそうという人が多いのが目につきますね。

璞　私はジャズをやっていますが、ジャズも良いフレーズは出るにまかせます。昔の俳諧師も孕み句を持っていたらしいですが、つけられる所が来るまで待っていたのではないでしょうか。

明雅　芭蕉様にも孕句はありますね。たとえば「浮世の果はみな小町」など。

青宵　目先を変えたものばかり次々出された作品は、何か浅草芝居街の看板を見ているか、御徒町のアメ横を歩い

ているような気がしてしっくり来ない。

明雅　芦丈先生の夜店のステッキですね。自分に引きつけることが出来る句があればじっと待つ。

健悟　連歌の頃から有文無文（地歌・地連歌ヲバ無文ト申也。ミ常ニナキ風情、珍敷様、又花ヤカニ面白体ノアラハレテ、上手ノ仕業ト見ヘタルヲ有文ト申ベキ也（『九州問答』）ということが言われますが、句毎にいい句、引き立つ句を出したいのは連衆としては人情ですが、そこで何が「いい句」かを決める捌きの責任は大きいですね。〝夜店のステッキ〟は作者よりむしろ捌きのデザイン感覚から来るものでしょうね。

司会　捌きの好みでしょうね。

璞　杏奈さんがおっしゃったように、日常的なことばかりでは表層的になりすぎる。意識下の世界で、自は他と合流して、深層とか表層でもない、中層をいくような所をねらいたいと思う。

連句協会報の十二月号のエッセイではもう一つ、村田治男さんのがありまして、私の考え方に近いことを書いています。ハウズナーという人の画を眺めていると、意識下の世界がひろがって来て、自は他と合流し溶けあい、自でも他でも自他半でもない世界がどんどん拡大していく。創造力とは、表現力とは、神と一体をなして能動的に行動する。この行動は連句における付けの行為に似ているというもの。

司会　村田先生は詩人でもいらっしゃいますが、そればかりでは…。

璞　中層域をいくと考えればよいのではないですか。

健悟　几董の『附合てびき蔓』には、「景気と見ゆる句に情の句あり、情と見ゆる句に景の句あり」といって「附合穿鑿論」に落ちて一巻の調子を失なってはいけないと、すでにそういうことを問題にしてますが、「自他場」も実際にどのように運用されているかを調べて話をすると実があるかも知れませんね。

璞　連句は埴谷雄高の「自同律の不快」をかかえこんでいると思います。

健悟　猫蓑では自他場をしっかり教わりますが、それをかざして発想しているわけではないですけどね。そんなことをしたら身動きがとれません。

璞　男と女があるからオカマが発生する。自他場の分類そのものが悪いわけではない。二・五、四・三なども、この問題が先にあるような気がします。和歌が三句切れになってから連歌の発生があり、そこで（勅選和歌集）二・五、四・三がタブーとなったのでしょう。そのへんは『可能性としての連句』（ワイズ出版）で書きました

が。

杏奈　『電脳連句』（「電脳連句で遊ぶ」林義雄・辻アンナ　三省堂選書）を出したとき、四・三が多いと言われました。何でいけないの？　と思いましたが、四・三よりも三・四の方が確かに句が締まります。

青宵　若い人は形式にこだわらず、又、詩や短歌に慣れている人は割合に、四・三は平気。又、昔も懐紙に筆墨で書いたから長く伸したり縮めたりして書いたり吟詠しました。しかし今は活字本で歌仙も一頁に収めたりして、二、三分で一巻読もうとすると、四・三はつっかえる。凡そはなめらかに読める方がいい。

杏奈　連句の場合は旧仮名で書くから三・四のほうがぴっしりする。

璞　「俳諧自由」というから、タブーのよさもわかるのではないか。

健悟　俳句でも連句でも動詞の活用で終止形を連体形に代用するケースが気になりますが、ああいうのはどうでしょうか。

明雅　あれ困っているんだよね。まあ妥協しているけれどね。

健悟　妥協の範囲ということは。

明雅　そうだねえ、たとえば仮名遣いでも旧仮名で歴史的仮名遣いなのは文語体だからだが、いずれは現代仮名遣いになるだろう。終止形と連体形の混用は出来る限り直しているのですが、句によっては直せない場合もある。

杏奈　以前、パソコン通信で、新で通すか旧で通すか議論がありました。新仮名を一歩進めて、会話体ばかりでやったこともありました。この試みは一回目は受けました。感性の合う人ともっとやってみたいと思います。

青宵　口語でやれば現代詩や一部短歌のように五音七音の定律では収まらないことが多い。それに慣れる遠い将来には実現し、別の律が気にならなくなるかもしれない。それまでは文語定律でしょう。小生も口語定律を試みました。結構面白く行けますが―。余談ですが旧仮名はワープロで変換するのがめんどうですねえ。ある時、メーカーに交渉して旧仮名のを作れといったのですが、売れないと断られました。（笑）

司会　批評の場合は口語とどちらがいいですか。

杏奈　文語体だと、本当に正しいかどうか分かりません。

健悟　俳句にもその問題はありますよ。

璞　昔の人は自由自在に使いこなしていたような気がしますね。芭蕉や西鶴の作品も割に勝手な使い方をしているように思います。

司会　日本語は難かしいですね。

健悟　言葉はいきているというが、口語体の場合と文語体を一緒にしてはまずいですね。

杏奈　作品からいえば、ナオ二句目「生まる」は「生(ア)るる」か「生(ウ)まるる」ではないですか。

明雅　その通りですね。

付け方も変化するか？

璞　私は先生の「夏の日」を読んでおりますが、あの中に矛盾付をやっておられます。

肉を挽く肉屋よ月のムンク展　　静生
独房にきく蟋蟀の雨　　玄一郎

砂をはく浅蜊の息の労(ツカ)れいし　　芙紗
片足跳びをちんがらという　　きよみ

この傾向はいまは受けついでいないような気がしますが。

明雅　信州大学のメンバーの中に高橋玄一郎という人がいて詩人です。共産党の弁証法の矛盾に目をつけて、前句の逆々をやって付ければよいといったのです。しかし、逆々と付けていけば結局打越してしまう。今考えれば矛盾付は空撓(そらだめ)に近い物だったのでしょう。これは芦丈先生が意識したわけではない。この頃が昭和連句の揺籃期でやがて野村牛耳さんの空撓的なものを可とする派と、清水瓢左さんの古典的な傾向とに分かれて行くのです。

健悟　矛盾付というネーミング自体、なにか時代を映していて面白いですね。

璞　言葉がまずあるという事。言葉を移植していけば、視点も移していけると思う。批評が確立するという点ではこの方法があるのでは…。

青宵　しかし、連句は文芸なんだから。

璞　いまは、その構造化すらしていないではありませんか。

青宵　構造から入って付けるのでは味のある連句は出来ない。作者は感性から入って行くのです。

璞　私は連句の構造にひかれて入ったのに、今の連句界は構造も何もなしにやっているようだ。印象批評ばかりが横行している。三句のわたりには打越しをタブーとした構造があるはずです。

青宵　座では付ける事に一所懸命ですから、打越しを忘れることもありますよ。

健悟　そうですね。付けて付けられてに一番喜びがありますものね。

青宵　打越しなど惧れず、つけ味とつけ筋をしっかりやる

ことです。付句が万一打越したらあきらめるか直せばよい。頭から打越さない条件を囲って作るのはどうかと思う。作品についていえば、表の脇と第四はナウ（猟の名残）と折端（タンゴの句）又、ウの十一（花の句）とナオの折立（羽ばたくの句）。目を閉じてみて下さい。字面や構造、表現では打越していないのでしょうが、打越しです。

璞　少くとも、表層とか中層とかを考えて批評しなくては批評の価値がないですよ。

青宵　自他場など基本的に考えないで進行しない方が内面的に深くなっていくのではないか。自他場を知らないとそのグループの連句の村からはじかれるのを惧れるような方もいらっしゃる。そろそろ自他場を唱えることを止めては如何か。

司会　自他場で計り切れないこともございますから、私どもでは「気分が打越す」とも申します。

明雅　自他場をはやらせたのは僕でしょうが、それは打越しを防ぐ最も手軽な分りやすい方法だと思ったからです。もちろん万全ではありませんが、これに代る方法がない限り棄てようとは思いません。

璞　概念が規定されていないと今のような議論もできないのは確かで、僕は捌くときは「自他場他（ジタバタ）しよう」というんです。

明雅　日本は主語を省略しているのが特長ですから、自他場を考えることは句意がつかみやすい。

青宵　自他場連句は型にはまる。連句では叙景句は大切だが、文芸で人情を細分するようなことは余り必要ではない。初めに構造ありきから入らないことです。

明雅　僕は自とか他とかは作者の主観でよいとさえ思っています。しかし、連句では叙景句より人情句の方が大切なのではないでしょうか。

健悟　そういったところから見ていって本日の作品は?。

青宵　ナウ二からナウ三の前句を置いて、ナウ四の鶯餅を買って帰る句は必然性がない。がっかりして了う。多分春だ、花前だということで付けたか。

璞　これは僕も、ん?と思った。

健悟　僕は前の三句に対して、日常性に戻したという点でうまいと思った。

青宵　又、連句を面白く付けよう付けようとするのがいいか悪いか。山の宿に来て、どうして女医など登場させるのだろう。怪しい恋をさせるにしても、宿で一人経営するおかみなんかだと、すーっと自然に分かるのだが。そして、激しい恋を無理して作っておいて続けず、直ぐ離れさせて了う—。

杏奈　ウの二句目は女医でなくてもいいのでは、と思うのは面白くしたいという気持が見えてしまいます。

璞　毛皮の人（オの六）をどう読むか、レトロか男か女か。そしてこれは恋の呼出しっぽい。

司会　読む事によっては幅があっていいと思います。

健悟　ウの四からの恋の一連はよいと思った。海鞘の後味で微妙な味の恋離れになると思う。

璞　この三句は表層的だ。しかし、ナオ四句目は親句でも、この辺りは多義的だと思う。

杏奈　笛が越後訛りなのかと思ってしまった。

璞　越後訛りの笛があれば面白いなあ。

健悟　せわしないものと、まだるっこしいものとの取合せを出したのでしょう。

杏奈　ナオ七。金婚はほのぼのとしていいなあと思いました。でも、次のダーリンはちょっと古いのでは？

健悟　金婚には前の茶碗の方がよくつく。

青宵　平句ですから結論を出してはいけない。それを付けがおぎなったり、新展開していくのですね。

連句形式など

貴夫　（所用のため遅れて参加された）

遅れてすみません。歌仙形式についておよび「秋風や」の巻について考えて来ましたことを申します。

歌仙は古典文芸としての性格を有していますから、巻き方に楷・行・草があっても、形式そのものに中世に成立した月花の美学、思想が込められていると思います。歌仙形式のまま月花の解釈や言葉の表現を現代的にやろうというグループがあってもいいわけですが、伝統とバッティングするでしょう。

「秋風や」の巻ですが、明雅先生提唱の「世態人情諷交詩」というのでしょうか、学童やら毛皮の人やら女医さん、若者、マジシャン、英雄、豆腐屋、陶工、宿六、碁仇などたくさんの人物が出て来て、発句に扇、挙句に佐保姫まである。これだけの人事人情を捌くには「付方自他伝」等にある「他ノアシラヒ」や「自むかひ」の手法を使いこなさなくては出来るものではないと知った次第です。

司会　方法論として玉の転がしかたは？

貴夫　江戸というのはとても人情に厚い時代だった様ですが、人事がつづく連句を玉が転がるように捌くには「他ノアシライ」や「自他場」がときに有効なのだと思います。しかしながら打ち越しを避ける方法は「自他場」だけでなく、たとえば『二第沖縄』（其角・嵐雪の伝書）

には、虚—実、自—他、多—少、体—用、気—質の十体に分けられています。「気」というのはやる気などの積極的な行動、「質」はこれに対して人の自然な性質からくる行動ですが、この気—質や虚—実によって巻いた作品と、自他場のみによった作品とではイメージが異って来るのではないかと思われます。

璞　近世になって即物的な付けになり、物の見方がリアルになったのでは、中世の無常観では対応できなくなったと思います。

司会　無常観の質が変ったのでしょうか。二上先生のところはどういう方向でやっていらっしゃるのですか。

貴夫　歌仙は「黄金率」と呼ぶにふさわしいほどの洗練された型を持っていますから、何句目に月を出したらいいとか、外在律としてほんとに良く出来ている。だから歌仙はやらなくてはいけないし、伝統の面白さを感じるのですが、その歌仙の外在律を取り払ったらどのような自在な流れや、どんな新しみが現出するのか、それをやってみたくて「非懐紙」を巻きます。

司会　非懐紙は難かしいですね。

貴夫　今はいろんな事が出来て、連句文芸にとって一番いい時代に差しかかったのだと感じます。

璞　談林の時代ですよ。懐紙も第二連・第三連という詩の方法でやれば、ソネットも「連」を形式とする。私が考案したオンザロックという形式も六・六・六・六でやっています。最初の六句は歌仙と同じ扱いでストイックに。

明雅　それじゃ、第二・第三・第四連は全く同じ調子ですね。

璞　百韻は人のコミニュケーションを破懐するのでは。長すぎて。

青宵　現代はだんだん短かいものになって来た。時代です。懐紙に書かないからかもしれない。そして、表を六句にするか四句で裏に入るか、六句にふさわしい発句・脇・第三なのか、いつもそれを考えています。志があって格調高くその調子を維持することは難かしくなった。発句と脇、ないしせめて表は議論出来る。この作も発句脇は甘く、表現上問題があるといえます。平句は余りにしても、座の文芸ですから。

貴夫　「世吉」は表で間延びしてしまう。

健悟　連句形式が短かくなっていくのは時代の要請があるとしても、百韻や世吉なども実際なかなか手応えがあります。反時代的感覚というか、歌仙のいかによく出来た形式かということにも思いがいきますし。

明雅　時間的にという事もあるが、メディアに載るという

ことを考えると短かくなるでしょう。

貴夫　二十句以上ないと、遣句の面白さがなくなります。ある程度長くないと芸が出来ない。

青宵　発句や脇、第三の具合では表を四句で折返した方が短かいものではかえってよいと思う。私は裏を自由な長さまで楽に乗せて続けます。名残四句は付けたり付けなかったりします。これは「獅子のる」。もし第三までが志と格調を維持出来れば表六句とし、裏はやはり半歌仙より長くします。これは「半歌仙兄」と名付けました。表六句は本当は二十四から三十六句位にバランスすると考えています。

璞　ウラに入って表六句の禁忌を破る解放感は捨てがたいのでは。

司会　百韻のように長いものは、読者として読み切れません。

明雅　百韻がお好きだったのは瓢左先生でしたね。

璞　西鶴は長いものを好んだ。ぼくはランダムに西鶴の独吟を読んでいます。

健悟　序破急は歌仙までですね。

明雅　いや、歌仙の序破急は百韻の序破急から来たのですよ。

璞　それを暉峻先生が起承転結を言い出したから…。

司会　（二上先生には前の発言をかいつまんでご説明しました。）

明雅　歌仙の序破急はウラ破の一段とナオ破の二段に分けて考えています。能は急で盛上るが、破で盛上るのが連句なんです。

貴夫　能は見ていると、あっけなく終わる。序破急の「急」はあっけないことではないでしょうか。人の一生も終わりはあっけない。

杏奈　昔の連句人は末路がはっきりしない人が多いですね。越人なんかも。

青宵　連句する人は哀れです。（笑）

健悟　哀れ？

青宵　急をあっけないということに言うと究極には挙句だけが急かもしれない。そしてあはれの極みが挙句の姿。心。まあ、連句は平句の面白いのもあり、発句、脇で面白いのもありです。それを拾えればよい。厳しさを求める連句なら、究極には発句・脇・第三のみでも連句はよいかと思うことがあります。

璞　三句いくと連句です。その中にすべてが集約されるから。

貴夫　ところで、時事句というのは入れなくてはいけないものですか。

明雅　芭蕉の時代には時事はなかった。これが盛んに出るようになったのは、おそらく昭和、終戦後のことでしょう。それ以前はご政道を批判することは禁じられていたから。

貴夫　どうしても必要なのでしょうか。

明雅　必要じゃありませんが、現代連句には時事句は定着した形ですね。

貴夫　恋と性愛が混同されて、濃厚な恋をというと性愛の句が出て来る。

健悟　恋句はかないません。

明雅　アラワな恋は反対です。

璞　しかし、今のＴＶドラマの恋は基本的には古い恋です。「愛染かつら」から変っていません。

明雅　徳川時代は恋は罪の意識、あわれがあった。今はそれはなくなっていますね。

青宵　恋は表現の問題です。いろいろな心の内面を感じさせないと…。

杏奈　女という字が出ると恋だといわれるのは異和感を持ちます。後朝も古い言葉ですがいいと思う。

貴夫　後朝は、夜明のコーヒーですね。

健悟　連句の新らしさというのは本日のテーマです。連句批評のあり方の中でも重要な項目だと思いますが。

貴夫　朔太郎以後の現代詩の文体や現代川柳の文体を取り込む必要があります。

璞　ただ詩の文体を取り込んでいけば新らしいか？　それが連句の落し穴だろう。無論ものまねをすることが連句の一つの方法ですから、たとえば自由律の俳句をとりこんでもよいのでは。二・五。四・三なんかもそれで考えられるのでは…。

青宵　詩人は一句一作に長い考えと修正の時間を持つ。連句は座で即つけるから粗雑になるかも知れない。しかし、その味も特徴なのだろう。そして、連句は公性がなければ成立たないし、公性はともすると平俗・平凡になる―。

璞　芭蕉は凄い人で猿蓑から炭俵へいき、俳諧の「新しみ」を実践した。

貴夫　丈草、嵐雪みな禅門を叩いている。俳諧は人としての悟りを秘めたものだと思う。

健悟　「ファッションと言ってしまうと軽々しいかも知れないですが、その軽さゆえに時代のエッセンスがあり、ものの哀れさえ、そのようなものとしてあるかも知れない。」

司会　ではこの辺でお一人ずつ結びのご発言を。

青宵　連句はいろんな作り方も読み方もあり、今日ファッション性も必要だし、形式と内容の問題もある。又、連

句人口を増やすのに、やさしいよ、面白いよと勧誘している事も問題で、本当はものすごくむづかしい奥深い文学だと思います。その辺りを覚悟して連句にとり組むことが求められているのではないでしょうか。

杏奈　連句というのは、連衆がその場の切り口でひとつの世界をつくっていくことだと思います。その意味では連句の新らしさは、表現方法もあると思いますが、集っている人の思想も心もある。赤裸々に本心が分かる。思想の新らしさを感じるのがよい。自分に即していえば表現をもう少しみがかないといけないと思います。

璞　連句批評は成立つと思う。今回のように各世代のレンキストを集めて討論できるのですから。

貴夫　一俳諧人の意見を聞こうという。「猫蓑」に対する認識が変わりました。

健悟　連句一巻を味わうということは、そのベースにある連衆の思いをどこまで受けとめられるかという、まあ大変なことだということ、改めて考えさせられました。

明雅　今回は若い世代の方々の連句に対するお考えを直接、卒直に伺うことができて、本当にありがたく有意義な会でした。ご出席の皆様、またむずかしい司会の役をして下さった式田さん、佛渕さんに深く感謝致します。

司会　ほんとうに長時間ありがとうございました。（完）

後記

東　明雅

この座談会、いろいろな問題を取り上げ、ご出席の皆さんが、それぞれ積極的に発言されて、大変楽しかったし、また、有益であったことは、この会の最後、まとめのところで各人が発言しておられるところを読んでいただければ分ると思う。

ただ、私たちが昨年から問題にしている、連句の批評と鑑賞の方法については、さまざまな意見は出たものの、はっきりした方法なり、方向なりは出なかったように思う。それは第一に、連句というものが、他の文学形態とはまるきり性格を異にした存在である為であり、従来、すぐれた鑑賞・批評が現代連句についてなされていないことにもよるであろう。

私は繰り返すようだが、連句のおもしろさは、一句一句自身のおもしろさもさる事ながら、その句が前句、打越との間で、どのような付味・転じを持っているか、また、何よりも一巻の序・破・急とヤマ場の盛り上げ方にあると思っているが、この会ではその点を十分に主張出来なかったのが心残りである。来年も、このような会を持って、右のような点を、もすこし、突っこんで議論していただきたいと考えている。

歳旦三ツ物

秋元　正江

杖曳いてあるく姿や恵方道

輪飾りつけし撫で牛の背

まなうらの花いっせいに開くらん

平成九年元旦

鳥雲に

秋元　正江

張手ひく絹四丈や鳥雲に

胡蝶蘭まなかひに揺れ麻酔かな

秋の灯に阿波染紙の藍かざす

秋篠川蛇みてをがむほとけかな

はったいや大和眉目の人にあふ

豆乳（日光湯葉屋）の膜にひびける野分かな

糸とりの真綿透きゆく雁わたし

白酒のおもたき薩摩切子かな

空港で貸せし扇子と子は発ちぬ

どんぐりのひとつ寝箱に子猫留守

◊歌　仙◊

黄梅

陽の射して黄梅らしくなりにけり　市野沢　弘子
　たぷりたぷりと揺るる薄氷　山口　みづゑ
子と飾る雛の調度下の段に　原田　千町
　自慢のクッキー舌にとろけて　篠原　達子
アンテナの鵙の贄見る月の宵　豊田　好敏
　路地をぬけゆく風の爽やか　倉本　路子
五箇山にこきりこささら踊り唄（ウ）　町
　袂さはればつけ文の端　ゑ
言霊の呪力にわたし金縛り　敏
　シンドバッドの張れる船の帆　町
発掘の砂漠の底に街眠る　達
　人質達を偲ぶ夏月　路
アイスクリン頭にじんとアルミ匙　町
　予想新聞競馬競輪　同
観音の後の面の大笑ひ　ゑ
　ひとり芝居の幕が上がって　路
チゴイネルワイゼンを聴く花の窗　町
　団扇作りに広告を入れ　敏

市野沢弘子　捌

俊寛忌地酒の盃をとりかはし　町
威勢がいいはやっちゃばのひと　路
昼さがり深閑としてニュータウン　達
文明の二字宇宙危うく　町
冬帽に顔の半分隠れゐて　ゐ
鞴祭の火床に張る注連　敏
あの辺はすっぽんぽんで寝るさうな　敏
乳繰り合うて払ふ臍繰り　達
後添ひは狐なりてふ御託宣　町
あてなき先へ送るＦＡＸ　敏
古稀の月芸ひと筋に生きて来て　同
千生り瓢箪棚にいっぱい　達
おくんち（ナウ）を終へし町中腑抜けなり　町
誰が吹くのかフルートの音　達
手びねりの茶碗に点てし濃き自服　路
心字の池に大き鯉跳ね　ゐ
花守りの夢のままなる花万朶　同
バルーン売りの降りてゆく坂　弘
路

平成九年二月七日　首尾
於　俳句文学館

象牙のファラオ

稲垣　渥子　捌

青梅雨や象牙のファラオ眉目秀で　後藤　東潮
過去より未来へ吹き抜ける南風　由川　慶子
「さか上がりできた」と弾む電話きて　後藤　志津枝
単身赴任味噌漬けに凝る　稲垣　渥子
夜半の月飛ぶ鳥に似た壁のしみ　慶
棚に広がる瓢箪のつる　枝
秋深し人に頼らぬ余生守り　潮
俳句講座でついひとめ惚れ　渥
エアロビもチョコもサラダも君も好き　枝
魚と泳ぐ夢をみました　慶
飛行機の点になりたる地平線　枝
知覧の母の被る手拭　渥
木枯しの浜踏み行けば砂の鳴く　潮
ダイオキシンの煙る寒月　渥
支払いは串の数だけもつ焼き屋　慶
野良の仔猫も馴れて太れる　潮
金髪の大道芸人花万朶　枝
修復待たる城の春愁　慶

夕雲雀主治医の告知受容する　渥
　吾と向き合い笑まう阿羅漢　潮
茶柱の立ちし白磁の碗ありて　慶
　打打発止盤上の駒　潮
変わり身の早さが特技タイニーシャツ　渥
　二人の世界ヨット追い風　潮
向日葵の咲く家に嫁し親となり　枝
　箪笥貯金をぽんと差し出す　慶
大き愛濁世離れしレクイエム　潮
　聖なるガンジス流れ滔々　渥
寝静まる町照らす月中天に　枝
　ふと気にかかるどぶろくの出来　慶
さわやかに足場のとびの身のこなし　潮
　釣場にアクセスネットサーフィン　渥
探ってもわからぬ切れめセロテープ　枝
　古典の授業長閑なる午後　慶
花に浮く白鳳の塔ひかり持つ　潮
　米寿の春に歌うカラオケ　渥

平成九年七月十日　起首
平成九年九月二十五日　満尾

数へ日の

岩井　啓子　捌

数へ日の納会といふ集ひかな　秋元正江
　ほどよく煮えし大根の味　岩井啓子
新刊書甦りたる名もありて　橘　文子
　闇の奥より響くサックス　倉本路子
二輪車の荒野抜ければ繊き月　佛渕健悟
　兄を行司に角力草吹く　浅賀淑代
国盗りの思ひそれぞれ濁酒　同悟
　女文字なる落書のまた　同路
学園祭あの夜ヒーローだった君　同
　啖呵売する蝮蝮黒焼　文代
板に干す海ほほづきの港町　同
　表札に読むヘボン式文字　代文
マイセンの皿一枚が遺産なり　代
　複葉機駆り消えた伯父さん　同悟
吃音の少年鳥の声探し　代啓
　丸木橋から春の暮れゆく　代
月光を吸ひて息づく花大樹　同
　おへんろ宿に長の逗留　代啓

踏(ナオ)みてみる唐臼重し俊寛忌　路
露西亜の船に煙昇りぬ　悟
吊さるる亀の故郷ガラパゴス　文
粉石鹸で洗ふジーパン　代
空手部の正座は額につばをつけ　悟
白子ぽん酢に「底抜け」※1の酔　代
凍窓の身上話妓の愛し　文
雪掻きに来し僧を帰さず　路
票読みも終盤となる中通り　悟
アウトレットのビラが散乱　啓
詰襟の警官月に吐息して　文
硝子の籠に飼ふは鈴虫　代
秋(ナウ)深し飛車角落ちで負けてをり　文
シルバーパスを見栄で使はず　路
香箱をつくりし猫※2と目が合ひて　文
艶拭き終る工房の床　同
山峡の丈余の空に花の舞　路
見え隠れする児らの凧揚げ　悟

※1酒の銘柄　※2猫が体を丸める姿勢

平成八年十二月二十七日　首尾
於　綾瀬プルミエ

神の旅

ささめきもあやに畏し神の旅
　袴着の子の強き面差し
巻紙に手馴れの筆を走らせて
　ケセラセラなどひとりハミング
竹群の上げたる月のほがらかに
　拝み太郎が威張る枝先
氷頭鱠珍味々々が口癖で
　いつもながらの布石定石
店番があくびしてゐる小半日
　この際だから翔んでみません？
謝謝と笑むばかりなる優男
　キムタク名告る猿山のボス
夏痩の足をしっかと踏みしめて
　月のゆらぎに流す形代
結ひの衆集へる酒の賑やかに
　畳み手拭ひ何にでも化け
束の間の花のかざしを水鏡
　ハングライダー春風に乗る

両吟

今宮水壺
倉本路子

揚雲雀電線工夫置き去られ（ナオ）
　腰弁当で過ぎし半生
江戸前の啖呵漫才片割れに
　涙壺より折ふしの声
熟年のファッションショーに誘はれて
　カサノバふうが幅をきかせる
もしかして愛のしるしの雪礫
　寒垢離やめて風呂に飛び込む
御舟描く「粧蛾舞戯」てふ夢世界
　昔語りの尽きぬ友垣
影けぶるマロニエ並木パリの月
　だてステッキを振ってうそ寒
胃（ナウ）を取りし痕を撫でなで秋渇き
　叙勲の沙汰を陣笠が待つ
黒塀に残る維新の弾の穴
　じゃんけんぽんで鬼を交替
百代のわれも過客か花しだれ
　いかなごを干す浜の静かさ

平成九年十一月十一日　首尾
於　大久保地域センター

壺子

秋惜しむ

内田　麻子　捌

旅の余韻未だ胸に在り秋惜しむ　内田麻子
　ちちろ虫鳴く低き灯の下　五味蓉子
ジャムセッション若者湧かせ月の出に　上月淳子
　一寸荒れさうこの後の酒　山口みづゑ
碁敵に又も賜杯をさらはるる　椿紀子
　蜜柑たわわに実る裏山　八角澄子
そ（ウ）の昔鯨を追ひし太地湾　ゑ
　裾を短く走る娘等　淳
寅さんのマドンナのうち誰が好き　蓉
　抱いて軽々三五キロ　麻
老犬も十六となり寝てばかり　澄
　祭囃の近くなる月　紀
通り庭日々丹精の釣忍　淳
　もう落目なりルーズソックス　ゑ
種の起源進化論にも異説出て　蓉
　すぐに食べてと栗の大福　淳
花疲れうつつに聞ける鳩時計　ゑ
　川蜷しっかりしがみつく杭　紀

木彫り雛ガラス雛売る七色に　紀
　プリズム眼から離さない子等　蓉
来年の話はづめば鬼笑ふ　澄
　金銅錫杖空海の寺　麻
雪下ろしやってみたくて新潟に　淳
　鍼灸院の美人受付　蓉
カーテンの蔭の絹ずれひっそりと　淳
　扇にのせて相聞の歌　ゑ
次々に則天武后の夫殺し　蓉
　風ひょうひょうと吹き過ぎる原　紀
望の月賞ひとり占め名キャッチャー　澄
　ふふむシャンパン飾るコスモス　ゑ
土瓶蒸し旧姓で呼ぶ級会　淳
　我が家の家紋紋帳に無く　蓉
四代目の宮大工にと夢を継ぎ　紀
　燕きたる郊外の駅　澄
花白き御多福桜塔高し　麻
　熱気球上ぐ陽炎の中　ゑ

平成九年十月三十日　首尾
於　梶が谷房連庵

雁一羽

梅田　利子　捌

「上野の会」入会を許されて
殿りの棹にとどかぬ雁一羽　梅田　利子

松の手入れのはかどりし月　八代　嫋

大鍋に秋蚕の繭を弾ませて　坂本　孝子

ボリューム高き子等のＣＤ　市野沢　弘子

軽やかにテニスのラリーよく続き　上月　淳子

河口を渡る風の涼しさ　鈴木　慎二

前座聞くしばし団扇を弄び　孝

襟ぐっと抜く粋な姐さん　嫋

うたせ湯に恋のほてりを鎮めゐて　二

リストラばかり流行るこの頃　弘

今わしは何党かねと秘書に問ふ　二

訛り懐かし蔵入りの杜氏　淳

冬荒れの佐渡に渡るは月ばかり　孝

恨み果たさず逝きし上皇　淳

オラトリオカストラートの声澄みて　孝

ブレンド紅茶自分好みに　弘

実験林百余の花の色重ね　同

塾の教師も目借り時なり　嫋

人生(ナオ)の夢を育む春障子　孝
拝金主義の付けがじわじわ　二
ホースより漏れくる雫犬舐めて　嫋
列車遅れて諦めの顔　同
冷し酒左遷のことは触れもせず　淳
熟れたる夜をまたも迎へる　嫋
後朝の鏡を愛すナルシスト　弘
青道心の放つ鐘の音　孝
蹲も時の流れに丸くなり　弘
どんぐり独楽で児と遊ぶ余暇　二
十三夜女ばかりの声高に　淳
炭火に親し串の錆鮎　孝
この秋(ナウ)の人気馬マチカネフクキタル　二
山の彼方は豊饒の海　孝
陽だまりに戦の日々の茫々と　淳
もんぺ代りの作務衣気に入り　孝
花冷えの根岸の里のごま豆腐　利
坂道を追ふ子規の逃水　二

平成九年十一月七日　首尾
於　俳句文学館

初紅葉

大窪　瑞枝　捌

対屋へ客人わたる初紅葉　渡辺　玄　鴻
歌口しめす待宵の笛　伊藤　白　鴉
崩れ梁雨後の川波たぎらせて　今宮　水　壺
チェックのシャツの袖まくりする　日下　悟　乃
パソコンにスキャンして見る在庫高　浅賀　淑　代
塩ひとつまみはったいの粉　鴉
崑崙山渡天の僧の灼くる道　代
水の在処を風で占ふ　鴻
片恋のただ書くだけの文の束　乃
鞭当てて去る君はカザノバ　壺
付け髭を取って寝ころぶ大の字に　同
楽屋の外に並ぶ消え物　乃
闇汁が煮詰まる頃の月の影　鴻
鯨来ると騒ぐ浦の辺　代
海越えのショートカットに挑戦し　鴻
後生楽なり叩く無駄口　壺
花片のそこばく溜る臼の底　同
身丈縮めて座る出替り　鴉

ハリウッド聖林（ナオ）と書き百千鳥　代
フープスカート夢がいっぱい　鴉
賽の目も自在に読める透視術　乃
組閣名簿に混る親分　代
パパラッチ群れるベンツの黒硝子　鴻
トンネルを過ぎ巴里祭に遇ふ　乃
風薫れよろこびの髪なびかせて　壺
焦がれ香もて包む妊り　代
後妻を打つ生霊の声すごく　枝
鞍馬の奥へ集ふ講中　鴉
月ばかり溢れて地酒酌む独り　乃
残る蛍に語る来し方　代
松（ナウ）ぼくり兄と弟の投げ合ひぬ　鴻
牛乳受けに鍵を置きます　乃
休診の午後は楽しむ地図の旅　壺
インドアプレイン漂うてをり　代
淡墨の花を展げて空寂か　枝
斑雪野遠くさよならの帽　執筆

平成九年九月十四日　首尾
於　浜田山　美少女亭

山笑ふ

金久保淑子　捌

山笑ふカチャリと閉ぢる望遠鏡　金久保　淑子
観梅の人途切れなき磴　蒲原　志げ子
食べこぼすちりめん雑魚に猫寄りて　豊田　好敏
よだれっくりの嬰を抱き上げ　田村　満子
ＳＬの汽笛のとどく月の窓　本田　弥生
二百十日も穏やかに過ぎ　加藤　道子
秋場所に味な蹴返し内無双　満
タカラジェンヌが部屋の女将さん　道
火遊びがいつか相思の仲となり　敏
柔らかすぎて切れぬ食パン　生
ゲリラとも疎通の機微に馴れ来たる　げ
ねずみ講にも懲りぬ面々　道
白蟻の親が飛び交ふ月の夜　敏
夏の神楽に篠笛のさえ　げ
パビリオンコンパニオンは退屈し　生
執念のみで征すパリダカ　敏
樹木医の資格うれしき花万朶　満
小川せせらぐ清明の頃　げ

海坂（ナオ）に周平逝けり春の雷　同

薩摩屋敷の碑に立つ　敏

呪術師のさぐり入れくる眼の光　淑

臓器売ります三行の欄　敏

埋火に鍋のシチューを焦げつかせ　生

料理ワインはシャブリなみなみ　生

濡れ場とはこんなものよとうそぶかれ　敏

噛んでこらへて裂けた袖口　げ

琵琶弾じ語る平氏の都落ち　満

ハイビジョンなり画像くっきり　同

月へむけスペースシャトル秒読みに　生

つづれ早よ刺せ急かす蟋蟀　げ

むかご飯（ナウ）ほっこりうまし旅の宿　生

ロビーの隅の煙草自販機　敏

展示せるビスクドールの色褪せて　淑

巣箱に卵のぞく幸せ　満

小買物落花に先を越されゆく　敏

霾ふる街に若者の群　淑

平成九年二月五日　首尾

於　鎌倉おんめ様　満

天覧や

神谷　安子　捌

天覧や土俵に蹲踞せる力士　神谷安子
化粧廻しの金襴に月　島村暁巳
秋燕の南へ渡る頃ならん　長崎和代
英語の単語二百覚えぬ　中田あかり
合唱に耳傾ける広き苑　八代　嫋
ふっくら炊けた筍の飯　吉村ゑみこ
母の日に笑ひ上戸の母を撮る　り
柱のかげで不意にキスされ　同
直会の酒に酔うたか出来心　代
紅をぼかして仕あぐ組紐　巳
信楽の壺がどっかと据ゑ置かれ　代
狸親爺の撫でる三毛猫　嫋
月の出に駄賃めあてに雪おろし　こ
レゲエCDポケットで鳴り　嫋
真顔にてストレス除けのカルシュウム　り
熱量単位数値変更　こ
花の旅夢にこの世を忘れけり　り
佐保姫の裾展べるまほろば　巳

種(ナオ)案山子ふうはり雲と遊びたる　　嫋
　フェリーボートで届く郵便　　代
ぽっと出が細元手にて店を持ち　　嫋
　税金のがれ秘策練り上げ　　り
小気味よく道流し行く撒水車　　こ
　座敷童子の堪へる三伏　　り
足ばかり伸びたアダルトチルドレン　　巳
　階段箪笥順に引き開け　　こ
何もかも捧げて悔いぬこの思ひ　　嫋
　初めはにかみ終りぐったり　　り
飛ぶ如き千日回峰月満ちて　　代
　床がととのふ名残狂言　　嫋
蓑(ナウ)虫をちちよちちよと聞きわける　　こ
　トルコ生れが想ふ故郷　　り
バザールに老の集ひて水煙草　　代
　岬に立てば潮寄せ来ぬ　　巳
浮き立ちて夜目にも著く花枝垂れ　　安
　風が押したか揺るるふらここ　　こ

平成九年九月十日　首尾
於　池袋　滝沢

梅雨の薔薇

桑原　美津　捌

梅雨の薔薇カンバスはまだ真白なり　桑原　美津
　水輪重なる庭の濁り井　式田　和子
くつろぎの軽音楽を揺椅子に　橘　文子
　渡り廊下のスリッパの音　村田　冨美
山の端に三五の月のただならず　八角　澄子
　大樹の梢に眠る椋鳥　青木　秀樹
萬聖節仮装の子等の戯れる　同
　メイク落してまだ好きかしら　和
お定まり殺し文句も聞きあきて　文
　かたくむすんだむすびなつかし　澄
コンビニで払ふガス代ＮＨＫ　文
　杜氏の中に碧眼の人　和
冬の月風止む湖の檸檬いろ　冨
　切替へを待つ電車単線　和
大臣はゆとりゆとりと言ふけれど　澄
　禁煙席で脳が散らかる　秀
デジタルで落花繚乱演出し　和
　湧きし如くに鳳蝶舞ふ　文

かぎろひて安らぎのあり天守閣　冨

初風炉には唐津斑目　文

横切ったをんな裾曳き声弱め　冨

駅前交番トイレ教へる　秀

㊨※1の薬重たく持ち歩き　和

ごねた甲斐あり伊良部好投　澄

浮き沈み三寒四温幸不幸　秀

逝く年送る密会の宿　文

手枕の型のままなる夢うつつ　冨

そっと抜きたるタロット※2の月　文

猪罠に小さきが掛りあはれなり　澄

これっきりかとしたむ濁酒　和

へぼ将棋待った待たぬも亦楽し　文

CS放送新規開業　秀

ディズニーのアニメ・タップでビビデバビデブー　澄

母は箪笥に宝貝入れ　冨

おいらんの外八文字花を踏み　津

ビルの窓からしゃぼん玉吹く　冨

※1 ㊨＝老人健康保険　※2 タロット＝占

平成九年六月十八日　首尾

於　古河邸園

オリンポスの果実

米谷　貞子　捌

大窪　瑞枝
米谷　貞子

オリンポスの果実摘まれぬ夏の果
　旗手凗然と頬つたふ汗
忙しく皿鉢料理を運ぶらん
　透欄間に鶴の飛び立ち
織りさして高機休む月の影
　炉火恋ひながら語るメルヘン
ロザリオ祭牧師バリトンよく響き
　意味ありげなる微笑みが罠
酔ひどれのもてたもてたを宥めつつ
　赤ランプつけ最終のバス
エイズ禍の医官企業に倫理なく
　まどろめば又夢にうなされ
熊よけの鈴を鳴らして郵便夫
　月凍ててをり開拓の村
直木賞ねらふ作品脱稿す
　ハーブ染する妻は指染め
花衣はんなり紋は浮線綾
　宮居のあたり鴟尾の霞める

銅鐸（ナオ）の出でし発掘弥生尽
　インターネット流す情報
空を飛ぶ魔女に掃かるる星あまた
　解脱求めて苦行荒行
崖縁に摑む狐の剃刀を
　血潮淫らに膚に透きくる
寄添ひて影の重なる浮寝鳥
　霜おく舟の纜を解き
賞罰のなくて傘寿の健やかな
　パスポートまた五年延長
銀化せしイランの壺に月淡く
　迎賓館に匂ふ木犀
反抗期（ナウ）いつ過ぎたのか秋の翳
　コレクトコール無心ばっかり
ペナントのカラーはレッドハーバード
　午後の珈琲淹れる監督
人の世の螺旋階段花浴びて
　うつそみの蝶包む掌

平成八年八月五日　起首
平成九年一月二十五日　満尾

枝子

初時雨

近藤　守男　捌

少年のみつむる沖や初時雨　近藤　守男
冬の林檎をかじるおばしま　八代　嫋
原稿はイーメールにて送るらん　松本　碧
図鑑広げる午後のリビング　島村　暁巳
月の客虫の音色にくはしくて　嫋
台風外れると告げる有線　巳
木の実落つ南部曲り屋背戸辺り　碧
ナップザックにカメラ口紅　巳
ショートヘア飛び乗って行く終列車　嫋
さそり座の下捨てし童貞　同
株下落連鎖反応西東　碧
二合徳利にレバの塩焼き　男
御徒町雑踏のなか月涼し　碧
親父譲りの水むしを飼ひ　巳
放浪の憂き世を捨てて丘の寺　碧
世間話の弾む石段　巳
花の雲馬上豊かな武者の像　同
撮影会は囀の中　碧

バスク(ナオ)にて畑打つ人のベレー帽　巳

アナーキストの暁に死す　高橋豊美

地下水道閲する職を営々と　巳

漬物樽にひそむ家霊　嫋

マグカップホットワインを両の掌に　美

雪をいただくおらが山々　同

借景に寒鮒を釣る孤影あり　男

ふうてん男後家を惑はす　碧

つれこんだ一流ホテル前払ひ　巳

ラフマニノフの楽のひそやか　嫋

国境森の草地に月晧く　美

烏瓜提げ自問自答す　嫋

マラソン(ナウ)の列長々と刈田道　巳

テラノザウルスCDで吼え　碧

催促に今出ましたと出前持ち　美

風船玉をつける自転車　嫋

人騒のフリーマーケット花の下　男

独活香りたる信楽の碗　美

平成九年十一月二十二日　首尾

於　新宿落合第一地域センター

黒き扉

坂本　孝子　捌

ときめきの黒き扉や神の留守　坂本孝子
　暖爐の薪の燃えさかる頃　渡辺玄鴻
レザーの香街駆け抜ける新車にて　吉澤蘭石
　いなり三個をコンビニで買ふ　井上鶴鳴
夕月に舞台稽古のひと休み　大窪瑞枝
　静寂めがけて鳴きしすいっちょ　日下悟乃
県境(ウ)の峠に網を張る鳥屋師　枝
　刺子の針に込めた思惑　乃
男子校ゆかずば恋もあったらう　鳴
　ベアトリーチェは笑ふばっかり　枝
アイスクリーム・トリプルショコラ・バナナパフェ　鴻
　月斜交ひに嘗める蝙蝠　乃
内戦の砲火を逃れ一家族　鳴
　捻ぢ込みヒール麻薬しのばせ　枝
襲名の披露はホテル借り切って　枝
　ちびた穂先で奉賀帳書く　石
百済仏裳裾に花の散りかかり　乃
　パンソリの庭漕げるふらここ　石
　　枝

片雲(ナオ)の旅淡雪のホームから　鳴
消費者金融大き看板　石
毒をもて毒を制する魔女の匙　鴻
会心アーチベンチ総立ち　石
過ぎし日の渚に足を浸しをり　鳴
行き処なき凩を聞く　枝
温めあふ毛布するりと床に落ち　鴻
瓦版にて囃す心中　枝
加賀蔦の切り火をうけて怪我もなく　乃
地酒の冷やがシェフのお勧め　鴻
銀鮭の婚姻色に月の影　同
宇宙戦艦接舷の秋　鳴
蒲(ナウ)の絮ふはりふはりと子の夢に　石
贈呈本を重ね置く書架　乃
引越しの手配ばかりが上手くなり　鳴
光頭会の新しい星　鴻
優駿の蠶奮ふけふの花　子
裾野の春に鳴り渡る鐘　乃

平成九年十一月十五日　首尾
於　高田馬場　玄鴻亭

時雨るるや

式田　和子　捌

時雨るるや一寸詰めし縞の袖　式田和子
冬菜を洗ふ厨賑やか　梶井時子
大ヒットアニメの切符売り切れて　島村暁巳
用もないのにならすポケベル　久保田庸子
ゆうゆうと吊橋揺らし仰ぐ月　須田智恵
影くっきりと鵙の早贄　庸
選ばれた時代祭をやっと終へ　時
ホストクラブへ急ぐ槍持　巳
年下の男のいちづかはされぬ　恵
誇りをかけて自主の廃業　庸
贅六はお釣り必ず数へます　巳
水族館に飽かぬ赤鱚　恵
夏の月のぞく予備校空き多く　時
カウンセリングいつもアトピー　庸
砂漠では駱駝の瘤にしがみつき　時
五右衛門風呂に下駄の弥次喜多　巳
花の山樽酒先棒売って買ひ　庸
宇宙遊泳暮れ兼ぬる空　時

ハムスター（ナオ）お玉杓子もペットにて　庸

フィットネスジム競ふ割引　巳

新聞の折り込みにある尋ね人　惠

凶悪犯のひそむ晒井　時

白昼夢邪宗の信徒罌粟畑　巳

ためらひ疵を見せて迫りぬ　庸

莫連の煙草女工に引きずられ　巳

ＤＮＡを鑑定にかけ　惠

千曲川Ｓに蛇行し古戦場　庸

研師微吟の月の大桶　巳

刈安で染めし御袍を献上し　時

坦ぎ婆より求む松茸　巳

黙（ナウ）々と熱燗手酌の父なりき　惠

自慢の魚拓床に閑もる　巳

※「海潮音」古本市に高値呼び　時

春の日傘をつぼめ小脇に　惠

御帰還の百済観音花の寺　庸

蝶々ひらひら吉のおみくじ　和

※上田敏の詩集　惠

平成九年十一月二十六日　首尾

於　源心庵

黄河中州

副島久美子　捌

鰯雲黄河中州に暫し佇つ　副島久美子
待宵の月のぞく連山　原田千町
オリーブの実のころころと盛られゐて　中田あかり
デコイの屑を払ふエプロン　大窪瑞枝
手の温くなりし児背に眠らせる　上月淳子
ぴんと張りたる雪吊の綱　町
僧若く狐狸に施行のあぶらあげ　同
ねずみ鳴きして女潜みぬ　同
叶はざる恋ほど想ひつのるもの　り
里帰り交渉これも政治よ　淳
支持率のパーセンテージ上乗せし　同
オンザロックの氷揺らして　枝
夏場所の打ち出し太鼓仰ぐ月　り
市電の線路ありしこの道　淳
カーナビの画面突然ちらつきぬ　枝
凝るたまごっちいい年をして　淳
うっとりと仙境にあり花乞食　町
ベルサーチにも春の蚤とぶ　枝

パエリヤ（ナオ）に入れる蛤・むき浅蜊　町
目配せをして若頭行く　枝
集会は材木置場丁と半　り
πで表す限りなき数　枝
土用波サーフィンボード躍らせる　町
ペット連れなら嫁ってあげるわ　枝
令嬢に鞭を挙げてはひれ伏して　淳
風ざわざわと揺する裸木　り
鎮守様まもる者なき過疎の村　枝
ちさき葛籠をいつも取る主義　淳
高機の休めば月の影そそぐ　枝
フェアリーサークル作る茸　町
小鳥（ナウ）来と告げくる父の独り住　同
国債五枚老の財産　町
校庭にタイムカプセル埋め戻す　同
似た者同志夢を追ふたち　り
讃美歌の合唱花の昼下がり　同
蘖萌ゆる大き切株　枝

平成九年八月二十九日　首尾
於　俳句文学館

後の月

染谷佳之子　捌

居酒屋に廻る水車や後の月　染谷佳之子
　蚯蚓が鳴くと記す短冊　今宮水壺
美術展長蛇の列の尾につきて　山本千代子
　小型のリュック肩にひっかけ　竹田登代子
妹が生まれひとりでおつかひに　倉本路子
　日焼けくらべで貰ふ賞品　千壺
揚羽蝶谷渡りゆく平家村
　奥の神棚昼も灯せる　千壺
カタコトで誓ふ言葉も愛らしく　路同
　たゞ恥かしき混浴の風呂　同之
おつまみにからりと揚げし魚の骨
　今日から煙草やめてをります　千壺
月光は寒しと貧乏ゆすりして　壺登
　テレビに映るワイキキの浜　登同
小錦もいよいよここが正念場
　ころがりさうになりて転びぬ　同千
花の雨ひるねタイムの保育園　千路
　囀りの中立てる三脚　路登

荒東風(ナオ)に手馴れし竹刀打ち振らん　壺
　大事々々と磨く禿頭　千
蒟蒻のバリエーションでダイエット　登
　げっそり痩せし日本経済　路
蛇の衣入れし財布のふくらんで　千
　祭り囃子に心そはそは　之
天女とはかかるものかと寅次郎　壺
　忘れられない君の残り香　登
ポケットの携帯電話電池切れ　同
　老人保険でみんな長生き　路
何はさていざよふ月を見上ぐれば　登
　はるかな沖に揺るる不知火　之
伴(ナウ)天連の舘にからむ蔦紅葉　路
　家宝の剣賭けしポーカー　壺
えやないかええやないかとおだてられ　登
　汁まっくろな伊勢の素うどん　之
熱気球ゆらりと越ゆる花の丘　同
　仔猫のしっぽ夢をくすぐる　千

平成九年十月十六日　首尾
於　大久保区民センター

石のこゑ

椿　紀子　捌

涸川の石にこゑある冬日かな　佛渕健悟
　残る蝗を包む掌　日髙英二
楽屋口誂への品届くらん　近藤守男
　座布団の柄藍染がよし　椿紀子
満月をいただくあれは俺の山　悟
　かがしをかつぎ帰る畦道　二
ねんごろにかぼちゃ頭を聖別し　子
　接吻好きの鸚鵡なりけり　男
父母の寝息うかがひ踊場に　二
　大尉が呉れた札を数へる　悟
先着順当店出玉無制限　男
　すべってころんで泥ンこの豚　子
探索の船宙外を往きてあり　二
　酒杯に泛ぶびいどろの月　男
天瓜粉つけて寡黙の牢名主　悟
　坊ず畳に三線（さんしん）を弾く[1]　子
才なきは一人遅るる花の道　二
　獏がひる屁も初虹のいろ　悟

凧糸を足指で引く肘枕　男
日本國の浮沈賭けたり　悟
電算機己が預金を掻っさらふ　玲
未だ婚礼の衣裳届かず　悟
麗しき双の乳房の距離さぐり　玲
ヌーディストらに交る山羊脚　二
ギロチンの踏板濡す寒の雨　玲
死ぬ※2といふ語に過去形はない　二
石で焼く魚料理は熱々を　男
叔父からもらふ白い帆船　悟
詞華集の紫紺の帯を捧ぐ月　玲
蜻蛉の羽は次世代を指す　悟
秋場所はちょん掛の奇手あざやかに　二
前の週から啜るやま芋　悟
黒シャツのゴッドファーザーエプロンし　男
揺椅子の背に陽炎ヒの立つ　玲
花の下花見虱に転生す　子
どんたくどっと繰出す街　男

※1　琉球畳　※2　或る貴族の言葉

平成九年十一月十八日　首尾
於　世田谷代田　アトリエ・F

日高

木香バラ

長崎　和代　捌

咲き初めし木香バラの館かな　長崎和代
　籐椅子二脚並べある庭　浅賀淑代
夏期講座電子辞典を引きもして　坂本孝子
　ちびたクレパス箱につめ込む　杉山壽子
月落ちて運河の橋を潜る船　太田けんのすけ
　生活の音の動く爽籟　壽
栗を焼く啣へ煙草に顔しかめ　孝
　日曜の弥撒靴を履き換へ　淑
開拓の荒地に吾を追って来し　孝
　カリブ海にも連れてゆきたい　淑
やがてくる金融界のビッグバン　孝
　不透明ガラスバリバリと破れ　壽
全集の塵を払ひて漱石忌　け
　月に謡ひつ雪見酒なり　孝
園長にゴリラの見合話くる　淑
　ひと目で分る渾名親しき　代
病室に花惜しみつつ書く日記　け
　うぐひす鳴きて明くる山の湯　孝

しゃぼん玉吹く子の顔も飛んで行き　壽
貝殻骨のあたり痒がり　淑
縄文期活断層の跡も見え　け
借用証の楔形文字　孝
白夜にはバックギャモンの指南役　淑
沖を目指せばいつか人魚に　孝
片恋は讃岐の石の濡るるまま　け
不承不承のいつか身籠り　壽
脱サラの仏道修業揺れやすく　孝
お子様ランチ旗は三角　淑
影を曳く立待月の樹の下で　壽
登窯焚く脊の冷まじ　孝
緞帳の錦重たく芸術祭　同
寄付の残りで鉢洗ひする　け
リサイクルジュースの缶を圧し固め　同
思ひ出したき古里の春　壽
時を経し薄墨櫻花万朶　代
鞍をはづせば蝶の飛び立つ　淑

平成九年六月十八日
於　古河庭園

流し南風

中島　啓世　捌

流し南風多摩の横山うっすらと　中島啓世
防人送る葭切の声　式田和子
新刊の贈呈リスト書き上げて　豊田好敏
甘納豆をつまみ一服　内田麻子
十五夜の月に向かはせ陶の椅子　山口みづゑ
色白々と庭の穂芒　市野沢弘子
モンゴルの力士も混り運動会　和同
企業秘密の肌のお手入れ　同好
恋しさが泡立つように増えてゆき　好啓
猫すっぽりと捨てられし箱　啓好
身内から縄付が出て記事になり　好み
電車ごっこの窓に薄霜　み麻
御神渡り今年はなくて月凍つる　麻み
並び大名揃ふ雁首　み同
土地の酒入歯の口にかみしめて　同弘
通ふ図書館つひに日課に　弘和
満寿夫描く花の一枝紅の濃く　和好
定規を引いて切らる菱餅　好

夢(ナオ)の中お囃子にのり蝶乱れ　麻
おいでおいでと招くのは誰　和
オリエントエキスプレスの寝台車　弘
ウイルス侵入ブックパソコン　み
夏百日僧の頭すっきりと　好
鰻待つ間にちょっと触って　和
「失楽園」そんなのはもう古いのよ　弘
ホットココアがじわじわと利く　麻
メーカーのトレイナーしか着ない孫　和
通り魔除けの笛の売れ筋　啓
稔り田にまっすぐの川月やさし　弘
通草ぱくりと裂けて摘まれる　麻
秋(ナウ)茜群れて窯場の裔をつぎ　弘
散歩するには万歩計つけ　み
結界を外して通る郵便夫　弘
朝寝夜更し皆自然体　麻
半蔀を落花のすべる冷泉家　啓
朱房貝桶並ぶ蛤　好

平成九年六月十一日　首尾
於　房連庵

佃煮を

中田あかり　捌

佃煮を買ふや下冷江戸小橋　中田あかり
連なる軒を昇り来る月　橘文子
ＦＡＸは異国の秋知らせゐて　原田千町
ドミノ倒しに勝った腕白　中島まさし子
もて余す仔犬三匹猫二匹
触るれば閉ぢて眠る草合歓　町子
お互ひの装備点検登山口
隠しカメラに狙はれてゐる　町子
雅子妃によく似た人の通り過ぐ　町し
婚礼決り少し悲しき　町子
色とりどり鬘の並ぶ美容院　町子
北風と来て急ぐ商談　同町
凍る海のクリオネ見たし月の夜　町し
ウオッカ呷りバラライカ聴く　町し
多民族罪の意識に差のありて　町子
信心次第木像も神様　町し
フィナーレは花爛漫の宝塚　町し
「臍みかん」とてひとつ貰へり　町し

農(ナオ)具市段々畠下り来て　子
パッチワークの青い壁掛　町
暗号の解読悩む総領事　同
至福の刻ぞ莨いっ服　子
験直しすっきりと髭剃り落す　し
間違ひ電話「こちら葬儀屋」　同
つまづいて恋の始めはそんなもの　子
ダチュラは魔女の媚薬妙薬　町
はめ殺しの窓に避暑地の妻の影　子
鈴虫放つ指の腹より　同
乱視の度進んで月のトリップル　町
皿に大盛柿と林檎と　し
老(ナウ)画伯皮外套の衿を立て　子
愛車と呼ぶは軽き自転車　同
金の籠歌を忘れたカナリヤに　町
唐墨淡く夢の一文字　同
散りしきる花静謐の奥の院　り
築地づたひに春の絵日傘　し

平成九年九月五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

沖南風

橋野代々子　捌

沖南風や思ひ切り引く地曳網　橋野代々子
卯浪さ浪に群れ遊ぶ鳥　豊田好敏
掛軸の落款の文字訊ねゐて　蒲原志げ子
箸にくづるる椀の巻湯葉　金久保淑子
雲抜けし立待月をビルの窓　田村満子
竝ぶデスクに野菊色濃き　萩原てる子
御命講交はす会釈も懐かしく　敏げ
妬っかみ半分「いよっ御両人」　淑げ
学士号秘めて座敷に左褄　げる
ビッグバン期し利子の計算　満
ウインブルドン誰方の為に残す席　敏
家伝外郎咳によく効き　同
凍月に冬至蒟蒻屋台酒　る
惜しくて履けぬフェラガモの靴　げ
交響詩オーボエ高くリードして　淑
陰口確と老は聞きをり　敏
花守の掃き清めたる箒跡
弥生野遥かSLの旅

馬柵（ナオ）に寄る若駒毛並み艶やかに　淑
上目使ひに童はにかむ　げ
横丁は駄菓子売る声倉の街　満
真打の芸惚れ惚れと聴く　げ
絽縮緬丑満時を待つお露　る
葎に埋まる庚申の塚　満
厄年も無事に過ごしてボランティア　淑
女社長の身勝手に泣き　げ
謹んで果てる振りする宮仕へ　満
よろず承知の染み抜きの技　同
既望なり夜空遮る塵もなし　げ
見返る壁の蟋蟀を追ふ　淑
営（ナウ）林署舞茸の出来問はれても　敏
蔵書の埃叩く跡継ぎ　満
要る時にトラブル頻りパソコン機　る
櫓囲ひの永日の盤　げ
花姿心行くまで眺むらん　代
佐保姫様の面影を描く　る

平成九年七月二日　首尾
於　鎌倉おんめ様

玉蟲乾ぶ

八角　澄子　捌

へその緒と玉蟲乾ぶ手函かな　八角澄子
毎年のことのべる絵筵　式田和子
菜園に完熟トマトもぎ取りて　加藤道子
スパゲッティはバジルでもよし　紺野千寿子
夜学子の指さす彼方三日月　八代嫋
歌ひて帰る爽籟の道　木村真呂
後の雛思ひ山ほど書きつける　千嫋
梨園の女形掟重たく　和
ぽっちりと涙も混る酒の席　道
香港島に中国旗ゆれ　嫋
ブランドのウッドで決めた此のホール　和
雪吊り縄をかける名人　千
月を背にうからやからと初大師　呂
孫にせがまれ土産いろいろ　千
届きたる手紙のシールドラえもん　呂
飽食の猫鼠追はざり　和
勝新の夢に繽紛花卍　道
グラデーションに霞みゆく見ゆ

蜑(ナオ)競ふ笛を合図の磯開き　同
　お給料日はやはり鱧かな　千
ぬらりひょん何時のまにやら座りたる　嫋
　箒目つきし土間に大甕　同
増やさずにたさずに老の春仕度　道
　アノラック着てカーニバル行く　嫋
グラマーなをんなに高き喉佛　呂
　巨乳細腰悲鳴嫋嫋　和
旅の宿月もすばやく西へ去り　呂
　雲居のひまを渡る雁　同
さぐりつつ棘抜き居れば木の実落つ　嫋
　シャッターチャンス阿吽むつかし　澄
老(ナウ)教授叙勲の沙汰を待ちわびて　嫋
　回転いすを窓にまはしぬ　道
玻璃越しに降りみ降らずみ潦　呂
　田螺居眠る山峡の田井　和
狭間より鉄砲構へ花の城　呂
　遠足の児等笑顔うつくし　澄

平成九年七月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館　千

三伏

原田　千町　捌

三伏や赤鼻垂るる伎楽面　原田千町
蛇の衣かかる舞良戸　大窪瑞枝
帰省子のアニメクラブに集ひゐて　八代嫋
チンと温めチーズバーガー　市野沢弘子
月見つつ火星探査を偲ぶ秋　豊田好敏
野塘蒿の迂回路に咲き　久保田庸子
香(ウ)を撒く聖体祭のさきがけに　枝
目配せをして消えた付き人　敏
ありんすと思はず元のくせが出る　嫋
時効寸前お縄頂戴　弘
籠球のブラックパワー底知れず　庸
滔々として寒月の河　弘
翁忌の旅に忘れし常備薬　嫋
ペットのメニューメモで手渡す　枝
レッスンのアン・ドウ・トロワ厳しかり　敏
制御装置で急に停電　嫋
ぬらりひょん謎々かける花の宵　枝
だんびら雪を払ふ駒下駄　庸

中東（ナオ）の紛争憂ふ弥生尽　敏
しゃがんで喋る水煙草吸ひ　枝
極彩の鸚鵡音痴の唄聞かせ　庸
飾りきれない縫ひぐるみ達　弘
抱き心地触り心地もときめきぬ　敏
捧げつくせど夢むナルシスス　枝
死の間際マリリン・モンロウ電話して　庸
秘事漏洩に凍る政治家　嫋
酒一壺沈菜ひと株食べ尽くす　敏
山には山の精霊が棲み　弘
親代々たたきあげたる鍛治の月　嫋
夜業の卓にマウス・クリック※　庸
青（ナウ）き服誰ぞかに似し美術展　同
泥棒市へ友と連れ立ち　庸
交番はこの頃いつも空っぽで　枝
背ややまろく托鉢の僧　弘
花曇われ王朝に遊ぶごと　敏
若鮎透ける小流れの石　町
　　弘

※クリック＝パソコンのマウスを押し操作すること

平成九年八月一日　首尾
於　俳句文学館

曼珠沙華

日高　英二　捌

地の底の逸楽告げよ曼珠沙華　日高英二
露のしとどに微熱ある窗　椿紀子
月白におそき夕刊配るらん　浅賀淑代
博士の散歩守る定刻　佛渕健悟
楽想が追って扉の中に入る　日高玲
新茶淹れつつ削る鉛筆　近藤守男
雪渓は九合目あたり奥穂高　代
見合なんどは忘られて候　悟
恍惚の果て恍惚の車椅子　男
そろりそろりと手繰る蝦蟇口　悟
なつかしき危険の香り復刻版　男
すぐ押入に籠る末っ子　子
月凍る魚の涙を拭いてやり　玲
白熱灯のあたたかき色　子
歳時記の議論了らぬ遍路宿　悟
岬の鼻まで仔馬つきくる　代
花の風小さき人の舞ひ舞ひて　子
爺の残せしお宝の筥　同

饅頭（ナオ）のあつあつを割る裘　悟
　ひっくり返る岸のべか舟　代
奈落よりデウス・エクス・マキーナ※しゃしゃり出て　玲
　印度のスパイ失業と言ふ　代
撃剣の声ひびきくる雨の庭　悟
　枳殻墻に濡れる回覧　玲
移植医の鞄に猿の生肝が　子
　前の女房をこっそりと呼ぶ　同
てきぱきとモーテル駐車誘導し　男
　笛吹く度に細りゆく月　悟
老蝶の飛びたつ音のかそけさよ　代
　癩王寂と坐せるやや寒　子
杣（ナウ）人に山の彼方の道を尋ひ　男
　珊瑚色した夕暮の町　代
宿題の運針はまだ三枚目　悟
　風呂汲み当番今日は姉貴で　玲
花びらを桝に泛べて飲み交し　男
　曖々として霞む雲雀野　執筆

※ 西洋演劇で危急の際に登場する機械仕掛の神

平成九年九月二十三日　首尾
於　世田谷代田アトリエ・F

脇起り　物すごく

物すごく男ばかりの田植かな　岡村不卜※
梅雨の小溝を逃げる小泥鰌　日高英二
絵双紙の二タ三ところを諳んじて　今宮水壺
大切さうに食べるカステラ　おおたけんのすけ
月射せる出窓に置きし貯金箱　近藤守男
踊り太鼓の何処か遠くに　峯田政志
秋興の刻ぞ酒仙と酒鬼が寄り　古賀一郎
ふてくされたるママとスピッツ　島村暁巳
雨降りにむなしく過ぎるバースデー　佛渕健悟
誤配の文にあけみとぞある　壺男
名物の講義律気に出て二浪　巳
河豚提灯のからからと鳴り　二
岸壁に塵芥馴るる冬の月　志
帰化申請の通るよろこび　壺二
謝々とあるかなきかの髭しごき　郎
小便壺もめづる壺好き　巳
此の花の咲くや姫御は花粉症
めかる蛙の仰ぐ夕空

佛渕　健悟　捌

僧院(ナオ)の尖塔黒きヨゼフ祭　け
　蕁麻分けて憲兵が来る　二
燃えのこる飛行機横に煮る珈琲　悟
　注射器立ててありし石上　志
今日こそはお医者さんだとたはむれて　郎
　露地に誘へば匂ふ十薬　巳
羅を透かして揺るる双の丘　壺
　覗く襖の倒れかかれる　巳
集めたる廃品回収海を越え　男
　朝シャンといふものの定着　同
早発ちの単身赴任のぞく月　け
　牧水忌とて眼鏡取り替へ　け
村々(ナウ)は葡萄酒かもすかをりして　志
　地下室好む猫の老いけり　け
短編のための書棚をしつらへぬ　男
　わがパソコンを覆ふ神聖　壺
花片が滴りとなる昼の夢　悟
　ゆたかな年を告げる囀　壺
　　※元禄時代の俳人　郎

平成九年六月九日　首尾
於　雑司ケ谷「大倉」

新涼や

本田弥生　式田和子　蒲原志げ子　橋野代々子　小原正子

新涼や浜辺に貝の散らばりぬ　本田弥生
　磯のしめりの匂ひ立つ月　式田和子
慎重にマロングラッセ含ませて　蒲原志げ子
　隣のピアノちょっとハミング　橋野代々子
猫ひざに猫の自慢の果しなく　小原正子
　別珍の足袋似合ふ足元　和
盆にのせ銚子あつあつ燗の酒　げ
　ストーカー除け偽名表札　正
不粋なる映倫モザイクばかりなり　代
　言葉のいらぬ仲とお見受け　げ
稜線にぱっと飛び立つ鳥写す　和
　油断の出来ぬ夏の相場師　げ
短夜の月の赤さは禍々し　正
　江国滋のローマ連作　和
礼拝堂祝福受ける善男女　げ
　駐在さんは今日もお暇で　代
バイク馳せ花のトンネル通りぬけ　同
　ところどころに残る淡雪　和

幼(ナオ)な児の指に止まりし紋黄蝶　正
　昔天才今不登校　生
バスケット年俸四十一億と　和
　汗の爺さま悩む減反　げ
落雷の火柱上る野の彼方　代
　風の神もつ袋しぼみぬ　正
ダイアナの恋のさまざま語る人　和
　私女王至極冷静　げ
国運を賭けての議論暖炉もゆ　代
　脱税対策並ぶ本棚　生
月は帆に夢の大陸羅針盤　げ
　デッキの隅の鈴虫を聞く　和
天長節明治生れに菊薫る　正
　福祉の店に羊羹を買ふ　代
塀の中重役会議開けさう　げ
　こんな所にあったポケベル　生
輪になってフォークダンスを花の下　和
　居眠りをする風車売　正

平成九年九月三日　首尾
於　鎌倉おんめ様

適　塾

本屋　良子　捌

適塾はビルの谷間に冬紅葉　本屋良子
　オーバーコートの衿を立て行く　竹内昭子
鼓々と鼓の音を響かせて　沖津秀美
　ていねいに拭く匂玉の泥　園部志げ
満月に看板の蟹動きだす　川治敦子
　新酒の香りほのか漂ふ　堀内洋子
唵蘇婆訶掌を合はせれば身に入みる　成瀬貞子
　ひとり占めするボンネットバス　松村あや
新妻は猫と鞄を提げ来たり　瀬尾千草
　朝な夕なに熱き接吻　良
抱けどもろくろっ首は天に伸び　洋
　どん底となる日本経済　昭
浮世絵の団扇に描く月細し　草
　潮入川に投網打ちたる　や
兜煮の大きな目玉皿に盛り　げ
　卓を囲みて団欒の刻　敦
横文字の門標しるき花の下　や
黄色いてふてふ白い蝶々　草

寅（ナオ）さんはつひに帰らず春の雲　貞洋
　子供歌舞伎におひねりの飛ぶ　昭洋
遊園地父はビデオで母カメラ　や昭
　ナポリを歩くエアーマックス　良や
死ぬまでに為すべきことの多くして　敦良
　蜜柑をのせて置き手紙あり　昭敦
悴みて待合はせする山の駅　げ昭
　アナーキストの恋は烈しく　洋げ
かみそりの刃も通らない石積みで　貞洋
　嗚呼に始まる広辞苑見る　昭貞
湖心へと舟漕ぎ出せば月砕け　や昭
　かりがね渡る落人の里　げや
疣（ナウ）神へ願掛けをする秋袷　草げ
　車椅子押す七歳の孫　や草
遺されしゴルフバッグは捨てきれず　貞や
　義仲どのに酒を供へる　美貞
花明り実現近き宇宙基地　洋美
　うららの縁に日記したたむ　洋

平成九年十二月五日　首尾
於　岐阜市華陽公民館

ころも祭

矢崎　藍　捌

ちっち蟬ころも祭の名残かな　矢崎　藍
そぞろ寒きに月のぽっかり　堀江加織
鈴生りの柿の一枝所望して　月山　壹
添削されてピンとこぬ歌　横田芙美子
螺子巻けばブリキの自動車走り出し　繁原敏女
網戸の向こう犬のお昼寝　織女
流木のあっけらかんと夏の浜　織
君に追いつき追いこしてゆく　福井直子
ポケベルの数字で打ったプロポーズ　壹
いつ見てもさてお若いぞなもし　直
夕月に辻の地蔵は赤頭巾　壹
あたれば死ぬる河豚と鉄砲　芙
平取締役の総務担当深い椅子　女
立った噂も煙草一服　藍
山陰の旅宿の朝は雨となり　織
とんことことこ羯鼓練習　女
花の世の花のようなる人ばかり　直
タロット占い春を愁いて

頬白の小首かしげる昼下り　女
監督という孤独なるもの　間瀬ふみ
フランスへ夢をつなげるVゴール　織
平原に出て蛇行する川　藍
恨まれし恋もいくつか夕焼雲　同
斑女の面のよよと泣き伏す　み
ロケットの細い鎖がからまって　織
都市銀行のビルの底冷え　み
窓際に泰然として生き字引　女
頁めくればこわいもののけ　織
月在りていつも遅れる奴がくる　織
ちいさな空地虫たちの声　み
晩秋の土偶の腹の渦模様　織
山頭火行く何処へ何しに　藍
キャンパスはプレイランドではありません　女
ないしょ話を運ぶ春風　直
知る知らぬ貰い酒して花の宴　同
蓬を摘めば香り立つ野辺　織
　　み

平成九年十月二十一日　起首
平成九年十一月十八日　満尾
於　豊田短期大学語学第二演習室

秋桜

山口　美恵　捌

まろびつつ風追ひ行くや秋桜　山口美恵
川のほとりに待ちし月の出　三浦智栄
芋虫の観察記録綴るらん　百武冬乃
途切れ途切れにパソコンのキイ　副島久美子
ニュータウンガレージセール始まりぬ　篠原達子
煙草を消して麦茶飲み干す　松本碧
山峡（ウ）のしじまに響く朝念仏　山崎一恵
お髭ひねりつ垣間見の宮　碧乃
好色者の血筋隠してにっこりと　碧
いやよいやよと溶けてしまった　達
売る度に報道写真値が上がり　久
伊良部グッズの在庫たくさん　乃
駅裏の酒場横丁寒の月　達
くさめの後に言ひ訳をする　碧
諫早湾歯ぎしりをする人もゐて　久
すらりとドアを抜けてゆく猫　乃
庭の主となりて久しき花大樹　恵
すぐに忘れる春の夜の夢　久

ちんどん屋紙ふうせんを配りをり　恵
暴力団の流れ弾飛ぶ　久
入墨は痛いから駄目プリントで　恵
顔寄せあって旅の計画　同
天草の殉教跡に梯梧咲く　達
地に這ふやうに二重虹立つ　久
ペアルック恥づかしさうな大男　同
さはさりながら薄情な奴　碧
高島田嘘で固めて抱かれて　達
「考へる人」レプリカの像　久
月の下動物園は静まりぬ　碧
古酒にほろ酔ひ軍歌呟く　恵
きのこ狩知らずに採った笑ひ茸　碧
ディズニー漫画小びと七人　恵
親善の少年野球アメリカへ　達
祖母の持たせる吉のおみくじ　同
ふうはりと肩の丸みに花衣　美
遥か遠くに百千鳥鳴く　碧

平成九年九月十日　首尾
於　池袋　滝沢

鷗外忌

山口みづゑ　捌

ゆくりなくパラソル同じ鷗外忌　山口みづゑ
しっとり湿る白きハンカチ　梅田利子
遠泳の潮目を越ゆる頃ならん　坂本孝子
自転車籠に耳長き犬　宮内志乃
半切の揮毫を頼む月の客　佛渕健悟
蔵にこもれば蓑虫の鳴く　日高玲
豊作の真っ赤な林檎手に余り　利
物の毛姫は世界征覇す　玲
女房にめっぽう弱いチャンピオン　乃
右ハンドルはキスがしにくい　悟
月乾く官庁街に木葉舞ふ　孝
仮想の夢に眠る鍵っ子　同
掘り出した踊る埴輪の深まなこ　乃
両切煙草ゆっくりと吸ひ　孝
ロケハンの準備ととのふ昼下り　悟
衣裳ケースにもぐりこむ猫　玲
軍楽隊花浴び一糸乱れずに　利
宝籤売る風光る中　孝

人の世を愚痴れば紫海膽の刺　同
紙捻でくくる論文の山　悟
冬の旅終にエホバに遇はざると　孝
川みな海へひたに流るる　乃
呼び声も風鈴の音も混り合ひ　利
羅を着てねまるくのいち　悟
昼に灯をあかあかともし有夫恋　利
短かき文を弁当の上　乃
墨壺をぴんとはねたり五寸角　玲
人事合理化せせら笑ひて　玲
貧乏を生涯の友月と酒　利
天山南路オアシスの秋　玲
皮茸の香りつるせる奥の院　孝
胃の腑のうちの癌なだめつつ　乃
歩けども進まぬマイムアルルカン　孝
陽炎の中坐る機関車　悟
後れたる渋民村の花に逢ひ　玲
捕へそこねた銀色の蝶　孝

平成九年八月一日
於　俳句文学館

炎帝

吉村ゑみこ　捌

炎帝の腰据ゑたまふ関八州　吉村ゑみこ
　蟬の抜け殻すがる板塀　百武冬乃
かき氷テレビゲームの子を呼びて　八代　嫋
　通販雑誌に付箋貼り付け　峯田政志
陸の灯が湾囲みゐる後の月　金久保淑子
　根釣の人の影の動かず　島村暁巳
バス・列車乗り継ぎて行く秋遍路　副島久美子
　ふと振り返るなつかしき声　三浦智栄
落書きの相合傘に名を見つけ　同
　もててゐるのにつのる焼餅　巳
デンバーでロシアはいまだみそっかす　乃
　月冴え冴えと涸河の上　同
初鶴の群を撮らんと忍び寄り　志
　ナショナルトラスト樹に札を掛け　久
地震予知諦めかねる学者どち　志
　靴の埃を拭ふ手のひら　嫋
風出でて花散りしきる野面積　久
　笊に乾きし栄螺蓋あけ　淑

街角(ナオ)に吟遊詩人春愁　同
懐中時計ちらと眺める　嫋
家伝薬一子相伝貫きぬ　淑
神武綏靖そりゃ何のこと　巳
B・M・Wサングラスして塾講師　嫋
魔性の女挑む会見　巳
やーさんも会長さんも通はせる　嫋
庭広々と芝に雑草　巳
自棄気味のジャイアンツファン声もなし　久
経歴だけで人をみる癖　嫋
月の石火星の石も画面にて　志
塩加減良き銀杏を食む　淑
湯(ナウ)の町の図書館ちさし直哉の忌　志
自分史綴る講座満員　巳
週一度単身赴任の父帰る　志
アダージョにてオルゴール鳴り　久
観覧車大きく廻る花の山　同
茶摘み終れば軽く晩酌　巳

平成九年七月九日　首尾
於　池袋　滝沢　久

◇源　心◇

萩こぼる

木村　真呂　捌

萩こぼる瞑りておはす思惟仏　木村真呂
色なき風の渡る階　篠原達子
初猟のチョッキ新調月の出に　百武冬乃
携帯電話ふっと途切れる　今宮水壺
旅に立つ友を埠頭に見送りて　長崎和代
珈琲占ひスタンドの隅　八代嫋
付け鼻のピエロは何を想ふらん　壺
鴛鴦の番ひの水尾を引きゆく　乃
ふたりして酒は二合半雪の夜　達
おとなを焦らすコギャル戦術　代
知恵の輪のするりと抜けて埒もなし　壺
やたら土産を買ひ込むが癖　乃
花の道初心者マーク突っ走る　代
越中海岸蜃気楼立つ　乃

ごんずいのこれは怒りか泣き面か　壺

大妖怪が陰で糸引く　嫋

旦那衆寄り集まって御相談　同

金は出さねど夜逃げ手伝ふ　達

なさぬ仲いつの間にやら切れぬ仲　嫋

呆け防止には恋が妙薬　代

バスタブに温泉の素ふりまひて　同

箒で払ふ月の蚊柱　達

轤踏む師は黙々と夏深し　乃

壁の時計がスロークイック　壺

子供らと夢を語りてきりもなや　代

父の胡座に猫の欠伸す　達

釣詩鉤李杜※1※2に倣はん花筵　呂

春日遅々と遠近の山　壺

※1 酒の異称（蘇軾詩）　※2 詩仙李白と詩聖杜甫

平成九年十月八日　首尾

於　池袋　滝沢

梅雨雷

蹴上げ散る梅雨雷となりにけり　豊田好敏

連句の宿の閉ざされる夏　青木秀樹

吸物に骨切鱧を出されて　東明雅

中にひときは喉の名人　東郁子

月のもとラインの岩の幻想も　山口美恵

カントに倦みて秋灯を消す　佐古英子

黄落の山の温泉の忍び会ひ　佐古英子

初恋などと心にもなく　雅恵

沖はるか巨船浪わけ寄港地へ　郁

アンコールワット修復が夢　樹

ドラフトの二軍選手を一軍に　敏

狼こはい赤づきんちゃん　雅

駅頭の餅花くぐり神詣　敏

家族全員風水に凝る　郁

佐古　英子　捌

探査機は火星めぐりて幾歳か　雅
レトルトカレーＮＡＳＡで採用　樹
プランターハーブばかりを育てをり　恵
こんちきちんと祇園囃子が　雅
粋筋はこれぞ男と褒めそやし　恵
抱けば崩れて抜け殻の君　敏
杯に浮かぶ月影揺らし呑み　郁
空に道あり鳥渡り来る　樹
海羸廻し旧友はみな老い果てて　雅
自我を押しつけ孫に説教　敏
一病をかかへて北の旅に出ん　郁
蜂飼ふ人の急ぐトラック　樹
うららかに洛中洛外花盛り　子
皿に盛りたる草餅の青　恵

平成九年七月十七日　首尾
於　電通築地南寮

◊二十韻◊

溢蚊

青木　秀樹　捌

溢蚊や老眼鏡の度が合はず　青木　秀樹

雲の切れ間を出づる十六夜　東　郁子

今様の衣裳を案山子きせられて　豊田　好敏

缶入り紅茶キオスクで買ふ　松本　碧

終着のイスタンブール人の波　敏

瞳と瞳で交はす愛の微笑　郁

年下で児連れで婆も連れてくる　碧

パチプロ稼業新築の家　敏

下鴨の糺の森に狸棲む　碧

鮟鱇の肝まづは乾盃　郁

還暦（ナオ）にホームページを開設す　敏

内閣改造物議騒然　郁

だめはだめきっぱりと言ふ大年増　樹

妻の腰もみ入る菖蒲湯　敏

月涼し妖怪都市は目覚めをり　碧

百済観音仰ぐパリジャン　郁

シェフ（ナウ）になるまでは帰れぬ鍋洗ひ　敏

自慢の凧を競ふ原っぱ　郁

山辺までＳＬが行く花盛り　碧

探せば声の洩るる巣籠　敏

平成九年九月十八日　首尾

於　電通本館会議室

微笑佛

冬菊や夕日漂ふ微笑佛　秋山志世子

綿虫消ゆる石段の上　五味蓉子

エチュードのたどたどしきに手を添へて　古賀一郎

猫ふんじゃってドアにぶつかる　大島洋子

秋山志世子　捌

読みさしの樋口一葉後の月　青木泉子

面影人か秋すだれ揺れ　洋

馬が肥え妻肥えジョッキーだけが痩せ　蓉

ピラニアなんぞのせる食卓　泉

矢印の極楽葬儀社徒歩五分　郎

壺中天てふ地酒供さる　蓉

夏柳(ナオ)蘇州の水に舟を漕ぎ　洋

短夜の月楼に惜しめり　郎

持ち寄りのカレーパーティー賑やかに　泉

スパイシーなの今どきの恋　洋

整形の明眸皓歯胸を張り　蓉

やっと入った会社倒産　泉

何(ナウ)になる現物支給ダンベルで　洋

長閑なれども開かぬ踏切　郎

紬着て老のつれ立つ花の旅　世

おらが山にて春の風聞く　泉

平成九年十一月二十二日　首尾

於　落合区民センター

銀杏

生田目常義　捌

銀杏散り都心の廃校またひとつ　生田目　常　義

初雁を見る夕月の空　青　木　秀　樹

あめのうを板前腕を振ふらん　佐　古　英　子

遠くに響くカラオケの曲　東　明　雅　子

早々とTAKERUの切符買はされて　樹

見合の相手誘ふ口実　雅

下ぶくれやや下り目が愛嬌で　義

ごはん一杯サラダ二皿　雅

サッカーの国際試合迫りつつ　子

風邪の子までが外へ出て行く

祝詞（ナオ）あげる通ひ神主鎮守様　樹

ビール焼酎酒はなんでも　同

山を背に月を眺むる月見茶屋　子

絶世美人魔女の変身　樹

あんさんと一条さゆりに言ひ寄られ　子

ステッキの馬握り颯爽　樹

ジョン（ナウ）・ブルも傘齢なればやや惚けて　雅

夢語り合ふ釣釜の宵　同

奥嵯峨の花に架けたる赤き橋　子

旅の衣にまとふ蝶々　雅

平成九年十月十六日　首尾

於　電通本館会議室

島の月

久保田庸子　捌

鬼太鼓の若者乱舞島の月　久保田庸子

色無き風に揺るる篝火　桑原美津

ハンガーのスーツに草の絮つきて　神谷安子

健康食品奨められをり　長崎和代

職退（ウ）きし友の筆勢おとろへず　峯田政志

すんなり伸びしペティキュアの脚　安

逢引はモンマルトルの丘の夢　代

浮世絵飾り暖炉とろとろ　津

米長者定紋付きの蔵開　志

秤にかける太っちょの猫　代

マッサージツボを覚えて喜ばれ　安
彼女の病多重人格　津
美人局いつか真の恋に燃え　志
月の光に羽憩ふ火蛾　安
酔も醒むタクシーメーター跳ねあがり　志
ブービー賞のカップ抱きしめ　代

点となりやがて消えゆく伝書鳩　庸
ふうせん売りの眠さうな声　津
見回して十字切りたる花泥棒　志
霞たなびく富士を望める　安

平成九年九月十九日　首尾
於　高木盆栽会館

作り滝

上月　淳子　捌

手入れよき庭に風生れ作り滝　上月淳子

百合の香ほのと枝折り戸の内　山崎一恵

長椅子に有線の曲楽しみて　倉本路子

黒パンサンド挟むピクルス　島村暁巳

弦(ウ)月は赤の広場に影落し　佐古英子

そぞろ寒しと寄ってくる女　篠原達子

秋薊棘が魅力とプロポーズ　桑原美津

猫がざらりと嘗める生足　路

骨までもしゃぶりつくされ烏金　恵

仏ほっとけ神はかまふな　淳

忘年会呑んでかっぱれ総をどり　達
揺るる踏板牡蠣船の月　津
眉高き水軍の裔腕組みて　巳
秘めたる恋に過ぎし年月　英
再婚の鞄バックもルイビィトン　恵
矍鑠として好む天丼　巳

鬼千匹意地張り通す半世紀　達
磨く愛銃猟名残とて　巳
廃村を知るや峠の花大樹　路
休耕田に立つは春虹　英

平成九年七月三十日　首尾
於　白金クラブ

寒夜かな

五味　蓉子　捌

鉛筆の芯鋭く削る寒夜かな　五味蓉子

ポインセチアの冴えし朱の色　秋山志世子

ビル街をブラスバンドの賑やかに　鈴木慎二

世界に流す同時中継　大島洋子

千秋楽はねし堀端月仰ぎ　篠原達子

あれ初雁と袖引いてみる　同

新藁にむせび抱擁ぎこちなく　二

少年Hひたむきな日々　蓉

社の体裁気にしお金でしゃしゃんのしゃん　二

紙ヒコーキを飛ばし続けて　洋

緑蔭（ナオ）を盲導犬は傍見せず　世

月を噴き上げ光る噴水　洋

いっぽんとなりし芸妓の裾さばき　二

閨に侍らす蒼きイグアナ　達

闇鍋は生きとし生ける物を入れ　洋

食酒（けざけ）三合米寿なる父　達

祝詞（ナウ）上ぐ禰宜の声透く奥の宮　世

雪代山女きらり谷川　達

飛花落花夢の如くに刻の過ぎ　世

新世紀負ふ若き耕人　執筆

平成九年十二月十三日　首尾

於　東郷神社社務所

冬浅き頃

杉山　壽子　捌

土牢の奥処枯葉の二つ三つ　杉山壽子

歴史散歩の冬浅き頃　東郁子

郵便碁想をゆたかに遊ぶらん　佛渕健悟

電池が切れて玩具動かず　橋野代々子

月に蹴るペナルティキック高々と　田村満子

オリーブの実をサンドイッチに　佐古英子

初猟に来て唄ばかり歌ふ人　悟

無粋の看板「好き」に降参　代

寅さんのテレフォンカード売りだされ　郁

アブストラクト彩のあざやか　英

七宝（ナオ）の紋入るる技玉の汗　郁

仏法僧を月と待ちつつ　悟

特ダネの代償に突く松葉杖　同

優しさいつか変る愛しさ　満

廃村に取り残されし姫と猿　英

たまり正油を小指にてなめ　代

にぎ（ナウ）やかな子等が顔だす楽屋裏　悟

神官継ぎて老いしうららか　代

菰冠り積み上げられて花見鯛　郁

石笛の音にてふてふの舞　満

平成九年十一月六日　首尾

於　鶴岡八幡宮直会殿

頭陀の袋

文音

浅賀淑代
鈴木千恵子

おしなべて天に諾ふ蓮の実よ
　月まなかひの静かなる池
ソネットを誦ず旅人爽籟に
　ポケットボトル呷るウオッカ

執務室未決の綴の堆く
　こぼれんばかり秘書の胸もと
ハーレーで待ってる三丁目のあたり
　頭陀の袋に一切を詰め
きのふより麦粒腫など煩うて
　水槽泳ぐ和金シナ金

モネ(ナオ)の描く踊り子裾をなびかせぬ

帰国の命を待てる総督

沖へ向け返せ戻せと叫べども

「越冬燕」月に絶え絶え

形代と知りつつ君に抱かるる

髪かきあぐる仕草変はらず

耶馬(ナウ)台国今現在も解けぬ謎

母刀自が賜ぶ坐雛なり

花の宴のっぺらぼうも浮かれ出す

縄をまはせば暮れかぬる山

平成八年八月十四日　起首

平成九年三月二日　満尾

代　子

氷　屋

鈴木美奈子　捌

氷屋ののこぎり響く裏通り　豊田好敏

白の絣の着流しに下駄　鈴木美奈子

リバーサイド倉庫シックなスタジオに　古賀一郎

コンテナ制御マウス操る　池田やす子

月光[ウ]に墨痕著くふみ書きて　永島靖子

君もわたしも鳴らす鬼灯　同

少年を男に変へし聖体祭　敏

あぐらかきたる幇間の鼻　郎

伯爵は位相幾何学権威なる　や

※アリアリオリオ食はず嫌ひで　郎

自転車（ナオ）でシュバルツバルト訪ね行き　靖

狼吠ゆる月の岩頭　敏

いろいろな思ひで集ふ憂国忌　や

甘きリキュールポケットに秘め　靖

くっきりと口紅引ける閨の隅　同

三日夜の餅をさゝぐ惟光　や

もののけ（ナウ）は空にけものは地を駈ける　郎

揺らぐASEAN仕切るアメリカ　敏

黙然と花に向ひて父定年　奈

蔓は春野に遊ぶ故郷　郎

※一番ベースになるスパゲティ料理で「盛り蕎麦」のようなもの

平成九年七月二十八日　首尾

於　四宮連句会

吊ランプ

下鉢　清子　捌

冬浅き安房の船蔵吊ランプ　下鉢清子
海雀飛ぶ罅の堤防　中田あかり
鼓笛隊市民広場に集まりて　篠原達子
クレープを買ふ列に並びぬ　倉本路子

煌煌（ウ）と月の都の目覚むるか　り
貴妃が寝床に偲び泣く秋　達
毒茸を踏みつぶし来て付け文し　り
ガラムマサラをカレーライスに　路
濃く淡く稜線はるか重なりぬ　り
すぐに疲れて坐る若者　路

三社祭見せ合ってゐる神輿胼胝（ナオ）　達

ビール冷酒くらくらと月　同

猿軍団キムタクと言ふボスがゐて　路

地検を逃れ愛人の閨　り

書画宝石あさりて妻はよそに咲き　達

晴れ後曇りそして土砂降り　同

すっぱりと一糸纏はぬ手術台（ナウ）　路

豆腐に刺して針を供養す　り

たまごっち花いっぱいの幼稚園　路

ホールインワン笑ふ山々　達

平成九年十二月十四日　首尾

於　柏市光ケ丘近隣センター

きざはしや

武村　利子　捌

きざはしや隠れ銀杏のはらり散る　武村利子

尾越の鴨の池に休らふ　式田和子

玉兎おとぎ話をソファーにて　瀬尾千草

焼おにぎりを籠にいっぱい　松本碧

志功彫る版画の女人ふくよかに　猪子春治

足袋ぬがされて胸のふるへる　尾関芳子

風疼く振り返らずに歩く街　千碧

ブラックマンデー西も東も　千碧

煎薬も鍼もあんまも皆保険　千芳

ＢＧＭに流す民謡　千芳

トスカナ（ナオ）のワインにはまり棲みつきて　碧

蜘蛛も脱皮をする事を聞く　和

待ってます刑期済むまで夏の月　芳

血液鑑定せまるマザコン　利

白黒の無声映画はぎくしゃくと　春

からくり人形茶を運びくる　千

故郷（ナウ）は一望千里ゴルフ場　和

おたまじゃくしをたもに競ひぬ　芳

切通し連れと越ゆれば花の峯　春

夢の続きに渡る初虹　碧

平成九年十一月六日　首尾

於　鶴岡八幡宮直会殿

鎌倉や

東　郁子　捌

鎌倉や紅葉かつ散る火燈窓　東　郁子

夕月昇る低き山の端　金久保　淑子

輪読の声さはやかにつづくらん　佛渕　健悟

手作り煎餅皿に盛りあげ　堀内　洋子

島つなぐ船おっかける鳥のゐて　杉山　壽子

トリプルデイト部活抜け出し　田村　満子

をとめ座の男は押しがいまひとつ　悟

鉛筆の芯長き筆箱　壽

極点の雪をとかして飲む珈琲　淑

外れ馬券を風邪のお守り　悟

蔵（ナオ）三つ持つ家構へ村を統べ　淑洋

子はゴルファーになると言ひはる　満悟

こっそりと魔女は箒で恋はこび　淑洋

惚れ薬から七彩の夢　悟同

柳腰髪にからまる夏の月　洋

呉れても困る羽抜鶏なり　悟

折（ナウ）合の過去さまざまにけふ傘寿　満洋

乾杯の酒挙ぐるうららか　壽

花めぐる花ともだちと花のうた　同

せせらぎに透く若鮎の群　洋

平成九年十一月五日　首尾

於　鎌倉ＨＯＴＥＬ　ＭＯＲＩ・山下飯店大広間

河童忌

日高　玲　捌

河童忌や空調口が息を吐く　日高　玲

ビルの隅より鳴き初むる蟬　神谷安子

クレパスの原色ばかり重ねゐて　山口美恵

歯磨きの歯をにっと見せる子　大窪瑞枝

絶ウえ間なく揺りつ崩しつ月海に　原田千町

風船蔓膨らめる恋　梅田利子

やや寒をすがる二の腕たくましく　中田あかり

未だ地雷の残る郊外　町

日の丸の旗挙げかねる村もあり　恵

合切袋携へて行く　安

茶碗酒路上生活暮れるらん　利り

紐放たれて坐りたる独楽　安

ロボットに警備万端任せきり　町

盗み出したる艶書一束　枝

貴婦人の裸に鞭をならす月　同

火の輪くぐらす獅子の鬣　利

ジンタには遠き昔の夢のあり　利

草摘む母の腰の手拭　恵

餌をねだる鷗の飛行花の雲　利

壜に五円のたまるうららか　り

平成九年七月三十日　首尾

於　白金クラブ

大枯野

百武　冬乃　捌

大枯野真ッ只中に足場組む　百武冬乃

岬の端を鶴渡る頃　篠原達子

カルテット揺り椅子ゆらり揺らしゐて　中田あかり

ドライフラワーお隣りに分け　梶井時子

槇の秀に淡くかかりし二日月　今宮水壺

くんちが来れば想ひ出すひと　達

囮籠閉ぢこめられてただ泣きぬ　り

故障続きの宇宙船飛ぶ　壺

たまごっち食べたい寝たいおまる出せ　り

略使ひ社長低頭　同

宰相旗仰げばプラハ朱夏の街　乃

友と選びぬ月のギャマン　時

星占ひ彼は悩める乙女座か　達

屑屋に払ふ恋文の山　壺

表札に生まれし子の名付け加へ　時

盈ちてしづもる甕の若水　壺

なつかしの三段跳の織田も逝き　時

羊なだめつ日がな毛を刈る　達

花の宴酒に別腸ありにけり　同

分葱のぬたの酢味噌たっぷり　り

平成九年十一月十二日　首尾

於　池袋　滝沢

峯田 政志 捌

頬 髭 に

頬髭に残る時雨や区民館　峯田政志

夜廻り当番きめる若衆　鈴木慎二

バーコード大売り出しにつけかへて　吉村ゑみこ

コーヒーブレイクほっと一息　中野昌子

山迫る鄙の駅舎に下り月　山田美代子

夫が丹精鈴虫の壺　二

柚子香り湯上りの女初々し　美

黒木瞳にほのかなる愛　同

マンションも環境汚染忍び寄り　昌

猫が一日くらす町内　ゑ

転(ナオ)ぶまい三年坂の甃　同

ゴルフコースは新緑のなか　二

月出でて車座で食ふ冷奴　ゑ

啐啄同時求め合ふ唇　二

恋の淵引き込まれたる身の果に　昌

母の忌修す般若心経　同

音(ナウ)はみな地底にしづむ夜の霧　美

干鱈あぶりて酌み交す酒　志

花守の踊るかっぽれ花の中　昌

囀り高く岩走る水　執筆

平成九年十一月二十三日　首尾

於　落合第一地域センター

ななかまど

八代　嫋　捌

ななかまど高原の店仕舞ひけり　八代　嫋

舌に馴染の新蕎麦の味　東　明雅

月の出のピアノ連弾揃ふらん　下鉢　清子

ゴブラン織の青い壁掛け　中田　あかり

めづらしき異国の花卉の名を問ひて　倉本　路子

汗清らかに若き雲水　雅

早乙女の物言ひたげに振り返り　り

エンゲージリングサイズ特大　清

滔滔と四万十川の向ふ海　り

佳境に入りし婆の語り部　清

酌(ナオ)みかはすうすらとんかち左まき　雅

きんぴら牛蒡ほんのりと焦げ　路

くはへきた烏のボール投げ返し　り

初天神の牛撫でる月　路

雪眼鏡一切合財捨てて蹤く　清

浮世の隅の小さき幸せ　路

舞(ナウ)台には半世紀かけ芸の友　雅

中学生と子持鯊釣る　清

花の雲芭蕉が聞きし鐘の音か　雅

東踊の調子整ふ　り

平成九年十月十二日　首尾

於　柏市光ケ丘近隣センター

清洲橋

山崎一恵　捌

時雨忌やゆっくり渡る清洲橋　山崎一恵

紅葉散りこむ小波の岸　篠原達子

カルチャーのコーラス講座ひらかれて　倉本路子

いつも集るコーヒーの店　秋山志世子

月の射す窓辺で読める唐詩選　近藤守男

北夷来寇秋あはれなり　高橋豊美

すずろ寒恋の坩堝の歌舞伎町　路

家出娘の乗る玉の輿　同

パパラッチ「英国のバラ」ちらしたる　豊

夢観音にお百度をふむ　世

なつかしき切り餡綿あめ氷すい　達

蝙蝠の飛ぶ月の軒先　豊

※サンドマン来るぞ子供ら早く寝よ　達

口説上手なゴーストライター　守

押し強く溢るる色気振りまいて　路

探しあてたる鮫皮の靴　守

森英恵プレタポルテに君臨す　世

テニスボールのはづむ下萌　達

もてなしに酔うて候花霞　同

武者絵字凧を眺めゐる部屋　守

※サンドマンは西洋で寝ない子を脅かす妖怪

平成九年十月十五日　首尾

於　江東区芭蕉記念館

雀の色

和田　順子　捌

冬の晴雀は雀の色にかな　和田　順子

影端然と庭の雪吊　倉本　路子

ラジカセに合はせるリズムまな板に　佐伯　靖子

子にせがまれて作る弁当　高橋　豊美

月を待つあの一球を論じつつ　緒方　健

夜なべしながらチャンス窺ふ　同

稲刈機嫁が来るとてうきうきと　路

どさっと届く通販型録　順

ビッグバン下ろした金の使ひみち　健

片手拝みで過ぎる観音　路

やうやくに店を開きし穴子鮨　豊
サーファー戻るワイキキの月　靖
モンローに似たる唇可愛ゆくて　路
お熱いのが好きもっとお酒を　豊
千里征き異郷の暮らし五十年　健
地球は美しと宇宙飛行士　靖

選ばれて交響曲の指揮をする　豊
あたたかに内にも外にも孫が出来　順
花びらをかき寄せてゐる象の鼻　路
番付表にゆるる陽炎　豊

平成九年十二月十三日　首尾
於　原宿東郷神社社務所

◊半歌仙◊

時鳥

加藤　治子　捌

奥比叡や聞き做し多き時鳥　加藤　治子

蔓あぢさゐの白き杉谷　横田　芙美子

給食の子らはカーテン開くらん　矢崎　藍

へのへのもへじまたも描かれ　稲垣　渥子

誰もゐぬ月の浜辺は波ばかり　小園　好

夜なべ仕事に投網繕ふ　岡本　道子

初孫に盆狂言の役が来て　渥

恋患ひに妙薬はなし　福井　直子

虚しさも彼の電話に吹っとびぬ　美

動物園の獏の夢なに？　好

高々と地球を廻る飛行船　美

ＢＧＭに「風」の曲かけ　藍

クリスマス何もないのに待ち焦がれ　美

戦火の街に冴ゆる月影　間瀬ふみ

支局長酒を隠した革鞄　藍

焼き蛤の香りたのしむ　好

訪問着桜に染めて花の道　み

村を結んで遠き初虹　執筆

平成九年七月十五日　首尾

於　豊田短期大学語学教室

梅　擬

くの　あや　捌

梅擬ほつほつ紅をこぼしをり　くのあや

背山に懸かる弓張の月　長谷川　芳子

風爐名残子らの躾を兼ねもして　杉山　壽子

土産のお菓子卓上に置く　猪子　春治

遠ざかるモーターボートに手を振れば　芳

嘶く馬の声の涼しさ　治

神主（ウ）は糊を効かせた袴はき　壽

空缶けってうさをはらさん　や

妊婦てふ噂のひとに何故か惚れ　治

腰痛なげくますらをの夫　芳

つひに来た名古屋の地にも総会屋　治

長幼序あり寒鴉にも　壽

冬月へワイングラスで乾杯し　や

ブリッジ楽しむ族にぎやか　壽

故郷に文化会館完成し　芳

春の暖炉に読みさしの本　や

花咲いて心浮き立つ和の中に　治

野遊び好きな女童の群　芳

平成九年十月二十二日　首尾

於　住友クラブ（名古屋）

挙母（ころも）の里

小園　好捌

はらからと挙母の里の雪見かな　繁原敏女

群れて遊べる鵠の池　加藤治子

湯豆腐のことことことと食べごろに　同

言葉上手な金髪のひと　原みね子

陶匠の背中を照らす望の月　長坂節子

博物館の庭の虫の音　浅香宏子

廃道（ウ）の秋の七草今盛り　月山壹

君のうなじにそっと接吻　み

お揃ひのスニーカー履き香港へ　節

パントマイムで値切る買物　女

面白き変幻自在章魚の性　壹

痴呆のはじめ行きつ戻りつ　稲田千寿

月涼しマウンテンバイク走らせて　谷本守枝

ばってら鮓はふるさとの味　宏

世紀末終身雇用は崩れ去る　女

あばよと消えし寅次郎さん　枝

花前線追ひて北上養蜂家　宏

子猫を抱いてちょっと居眠り　執筆

平成九年三月十八日　首尾

於　豊田短期大学

秩父なり

片時雨下見土蔵も秩父なり　安藤八木郎

枯蔓玩具飾る角店　権頭和弥

書を展ぐ机のあるじ思案して　清野榴子

表を通る一の碁敵　小川嘉一郎

友だちを異国に送る居待月　長ひとし

斜かいに飛ぶビルの鵜　子

権頭　和弥　捌

黄落(ウ)の田舎銀座のすぐ尽きる　嘉

岬はづれに妻と娘と　弥

パリコレのファッション気取る婆ふたり　嘉

男旱りのダンス教室　同

夏の月愛想ふりまき退院す　八

逃げの忠治が立食ひしそば　同

座布団を叩き民営化を遺し　子

なま臭坊主と交す自棄酒　し

番犬を蔑む猫の午後三時　嘉

判らぬ絵画値踏みして見る　八

バス連ね※トトロの森は花盛り　子

蝶生るる日に生る初孫　し

※ 劇画「トトロの森」のモデル比企丘陵

平成九年十一月十日　首尾

於　秩父西谷津宮本荘

十夜寺

佐々木有子　捌

はづしてはかける襷や十夜寺　倉本路子

蕎麦湯も添へる斎のそばがき　今宮水壺

スポーツカーエンジン始動のキー入れて　佐々木有子

断崖に立つ白き燈台　竹田登代子

月昇る漁夫の演歌の胴間声　登

溢蚊なれば打つな叩くな　壺

吊(ウ)したる鉢にみせばやしだれ咲き　路

バーのマッチの溜まる抽出　登

ウズベクの金をこっそり掘り出して　路

鼠算には指が足りない　壺

あがきつつ溺るる恋の蟻地獄　路

ふたり黙って籐椅子の月　壺

この宿の初孫祝ふ酒とかや　同

※下駄マージャンの音のガチャガチャ　路

鶏のひたすら砂を蹴散らして　登

老人ホームのどかなる午後　路

少しづつ陣地拡げる花筵　有

春風の丘犬と連立つ　登

※香港などで行なはれる大きな牌のマージャン

平成八年十二月三日　首尾

於　新宿区大久保地域センター

山姥

篠原　達子　捌

山姥の金時呼ばふ夕桜　篠原　達子

鶉顔なる田鼠出る頃　八代　嫋

カフェテラス本読む人ののどらかに　吉村　ゑみこ

電子辞典は実に重宝　副島　久美子

自転車の補助輪はづす昼の月　ゑ

生協注文残暑なかなか　久

秋祭具がたっぷりの鮨の桶　嫋

家系の自慢さてと始まる　ゑ

白皙のオルガニストの細き指　嫋

ミツコとシャネル日替りにつけ　久

蟻地獄不倫と言はれ燃えあがり　ゑ

刀を抜かぬ軍備むなしい　久

たまごっち三寒四温に風邪ひいた　ゑ

冬満月をだしにまた酒　久

声の雑誌テープ吹込むボランティア　同

マラソンコース湖に沿ひ　ゑ

制服の光る肩章花浴びて　嫋

風船売の空を飛ぶ夢　執筆

平成九年四月九日　首尾

於　池袋　滝沢

衣更へて

島村　暁巳　捌

衣更へて昔の風や神楽坂　今宮水壺

厨事見ゆ打水の路地　竹田登代子

それぞれにコーヒーカップ選ぶらん　村田冨美

新発売のソフト見せ合ひ　島村暁巳

公園の池の小波初月夜　長崎和代

猫の足裏を拭ふやや寒　橋本妙

周平（ウ）を読み返し酌むぬくめ酒　和

脇街道に藍染の店　同

先乗りの影も形も見当らず　壺

まぎれ込みたる鯨取る船　登

ナイフ買ふ北欧の町昼下がり　巳

青髯の頬こするたのしさ　妙

幼妻拗ねて涙でまるめこみ　和

月をかすめて蛟喰鳥飛ぶ　登

シャンソンも裏金も好き紳士どち　妙

ぶらんこをこぐ老の法楽　壺

単線を乗り継ぎてゆく花の里　冨

蜂の巣育つ深き軒先　巳

平成九年五月十七日　首尾

於　赤城社会教育会館

藪椿

須田智恵　捌

涛音や溢るるほどの藪椿　須田智恵

雲間はるかに鳥帰る頃　長崎和代

春障子親しき友と語りゐて　松本碧

隣のピアノジャズを奏でる　島村暁巳

昼の月ベストセラーのサイン会　同

行きつけの店新走り酌む　碧

青い目の印絆纏秋祭　代

路地へ逃げ込む掏摸の集団　同

浅草の小屋次々と幕を閉ぢ　巳

電話の前でお辞儀深くす　碧

髪洗ひ一生もん※を探す旅　同

アンティークベッド狂ふ後朝　巳

万国旗風にはためくジャンプ台　代

焚火に吠ゆる老犬の月　碧

夢いっぱい児は宝物見せ合ひて　代

インターネットに写す行く末　巳

木喰の里に舞ひ散る花吹雪　代

沓脱石に生るる穴蜂　巳

※一生もん＝一生つれそふ人

平成九年三月十二日
於　池袋　滝沢

石神井

両吟

今宮　水壺
登・坂　かりん

伝へたる石神井の名や青時雨
　初蜩に垂らす釣り糸
女子大のランチパーティー賑やかに
　ショートソバージュロングソバージュ
雲抜けし月また次の雲に入る
　終列車待つ駅のうそ寒

茸狩の乏しき苞を見せ合うて
　御徒目付の急ぐ奉行所
八つあんに読めぬ落首の走り書き
　犬の欠呻と猫の嘘と

壺

マンションの窓より月へ鬼は外
　君のイニシャルジャケットの胸
怒らせて抱いて泣かせて仲直り
　真打の芸蕎麦をつるつる
銀行も証券も皆操られ
　ステッキ肩に貝寄風の浜
花のあとよせてはかへす夢いくつ
　何ともなしに笑ふ山々

平成九年六月十七日　首尾
於　石神井　中屋敷

ん

こでまりや

松本　碧　捌

こでまりやツルゲーネフを懐に　松本　碧

つんのめるごと芝に子雀　金久保　淑子

石鹸玉姉と妹の仲良くて　百武　冬乃

水彩画描く父のちょび髭　今宮　水壺

月まろく高層ビルのはざまより　梶井　時子

占ひばかり頼るうそ寒　壺

蓑虫の声聴かせんと客を呼び　冬

おびんづる様てかてかの膝　時

閉ぢられし閘門朱き錆うかせ　淑

夏場所帰り酒の立ち呑み　壺

幽霊とすれ違ひたる木下闇　時

シンコペーションキスのちぐはぐ　壺

告白のピエロもどきに月凍つる　淑

消費税率にらむ買物　冬

老紳士期限の切れた定期出し　時

七福神はみんなにこにこ　壺

ゆったりと花の上漕ぐ隅田川　冬

青柳売りを招く軒先　執筆

平成九年四月九日　首尾

於　池袋　滝沢

団栗

宮川 侊子 捌

団栗を胸のポケット子の帰る　宮川侊子

マンションの階上る弦月　浅井沙衣子

文化祭参加してねと電話にて　山田歌子

一針づつの刺繍仕上げむ　武村利子

芳ばしきかほり漂ふ麦こがし　同

軒をかすめる夏のつばくら　侊

資料(ウ)読み古墳巡りの旅支度　沙

言ひたいことを我慢しきれず　歌

夜叉となる妻に夫は逃げまどひ　利

ウォッカ浴びて命からがら　沙

総会屋老舗との根を挽ぎ取られ　歌

出勤前の野球練習　利

有明の月に歳末大通り　同

炬燵の中の犬は幸せ　侊

夢に見る名人戦の碁の布石　歌

ウインナーワルツステップを踏み　利

丹の柱華やぎ京の花万朶　沙

静かな湖に初鮒の影　歌

平成九年十月二十二日　首尾

於　住友クラブ（名古屋）

聖夜

由川慶子　捌

ゆくりなく吾子は聖夜に生まれけり　後藤東潮

村をすっぽり包む大雪　後藤志津枝

汽車の旅文庫一冊読み上げて　柿本時代

目深にかぶるぼうしつば広　八木聖子

昼の月あげはの蝶の消ゆる森　由川慶子

小さきつどひの流す楽の音　潮

嫁ぎゆく娘に祖母よりのエメラルド　枝

恋しき彼はキムタクに似る　潮

風の中舌に溶けゆく砂糖菓子　聖

還暦記念歌集ゆかしく　慶

定刻にいつも遅れる人がゐて　代
　ブリッジの卓秋意そぞろに　潮
死神は不意打が好き月の下　聖
　実柘榴裂けて風にゆうらり　枝
絨緞を廻しのみする水煙草　潮
　灰色の猫貰ふ約束　慶
古地図をたどりて行けば花の寺　代
　湖のほとりの草のかぐはし　慶

平成八年十二月二十二日　起首
平成九年一月二十八日　満尾

胡蝶　みんみんや

みんみんや厨子にかくるる思惟仏
　巌の尻に苔の瀝
往く人は還る人なる街にゐて
　模型飛行機エンブレム入れ
極厚のサンドイッチを分けあへり
　熊がひょっこり月の裏庭
質(ナカ)草をかついで戻る大晦日
　小袖のひとの背ばかり向け
龍神の出湯で打たせた罪の身の
　七つの喇叭次々に鳴り
まっすぐにブリキの城に集ふ兵
　出身校を明かしあふ夜
青春もかけて痔持ちの泣き笑ひ
　団扇使ひの大叔父に似て

両吟

佛渕健悟
浅賀淑代

談合はヨッシャヨッシャで終らせる
　カリブの海は烏賊の豊漁
妹が拉致された日も同じ月
　花野にまろぶ刻のかなしき
あの青い小鳥の名前函数（ファンクション）
　昭和の御代はどこもこな雪
かたことと走る市電の朝が好き
　箱の仔猫がさいそくをする
花冷に並びてまねぶ定家様
　凧の奴の髭の長短

平成九年八月四日　首尾
於　調布深大寺

悟代

◊

百　韻

◊

若葉風

倉本　路子　捌

村長選の噂かしまし　ゑ
やうやっと客呼ぶ手捏ねハンバーグ　悟
寒満月に背をまるめて　玲
たてつづけくっさめしつつ引く御籤　美
でんでん太鼓くるりくるくる　達
飛び入りで電脳チェスに挑むらん　代
角のゲーム屋皆のオアシス　嫋
たそがるる枝垂桜の花万朶　代
めぐりて来る星の朧に　敬
王室（ウ）へアタッシュケース（二オ）で運ぶ蝶　悟
夢を託して還らざる兵　玲
ひょっこりと野良猫の来る昼下り　代
自習となりし2年1組　悟
組合の幹部会議はもめにもめ　ゑ
日がないちにち寝くされの夫　達
ジャケツより覗く胸毛の頼もしく　嫋
※ベレッタ銃に付きし移り香　悟
出窓には空の鳥籠揺れてをり　嫋

墨東に始る旅や若葉風　倉本　路子
涼し川面をひらりつばくら　篠原　達子
藍浴衣舞台稽古の続きゐて　日高　玲
予定変更ファックスでくる　吉村ゑみ子
預りし犬には食の好き嫌ひ　佛渕　健悟
ひまさへあれば道を掃く人　村田　冨美
べい独楽のはじき出したる三日の月　八代　嫋
推理小説めくるうそ寒　長崎　和代
山（ウ）の湯の垣根に見えし鵙の贄　須賀　敬子
医者の見放す病養ひ　悟
大津絵の鬼が懸想の藤娘　代
とても眩しい豊かなる胸　ゑ
甘えたきときは甘えよ父の文　達

回覧が来て写経中断　悟
除草剤ところかまはず撒きちらす　玲
すこし呆けたる婆の愛らし　達
大鯉が月を頬張る丑の刻　悟
蛇穴に入る地下のカラオケ　玲
御返盃注ぐ新酒のなみなみと　ゑ
唐物の罅つなぐ純金　敬
砂時計こぼるる砂の輪廻（サンサーラ）　美
婆羅門の僧菩提樹の蔭　敬
ノミ行為ばれたと言ってくる床屋　悟
軍鶏女房にいつもびくびく　玲
離れませんすっぽんみたいにあの世まで　代
韋駄天人生つんのめりたり　達
あんちゃんは重量級で揉まれつつ　悟
差し入れられし冷麺と月　ゑ
北鮮を逃れてきたる漁舟　玲
部屋の奥には又部屋がある　嫋
ゆりかごに双子の眠る花の庭　玲

まほろば知らす吾は佐保姫　嫋
三千代紙の小箱に貰ふ桜貝　ゑ
船医の叔父の話つきざる　悟
いとしさに毒を盛りたるリチャード王　玲
愛のかけらを探す枯野は　悟
歯車がきゅるるきゅるると鳴ってゐた　同
リバイバルするモダンタイムス　玲
震度4思はず摑む蝿叩　嫋
辣韮の香の残る掌　ゑ
日曜のトランペットは沖へ向き　達
おらが街にも高層のビル　ゑ
ももしきの大宮人ら温泉（ゆ）を見つけ　嫋
落ち目の歌手が鈍行で来る　達
ぼた山におぼろの月の出でにけり　同
いざ立上れ鯰五郎（むっ）守る会　代
はらからの浄土（ウ）を願ふ弥生盡　玲
何処へ出るにも通すジーンズ　ゑ
漱石集古書肆に飾る初版本　美

高値をつけし中古映写機　敬
ハイテクに蹤いてゆけない世代にて　代
ぽつりぽつりとつまむ塩豆　玲
銀細工象牙細工の軒つらね　美
ベリーダンスの臍に浮く汗　ゑ
燃えあがれひと夜かぎりの恋螢　路
沼にまつはる物語など　悟
六本木渋谷新宿梯子酒　美
あしたのためにロンヂンを売る　悟
花相撲櫓太鼓にのぼる月　美
施設の児らの秋の楽しみ　敬
潮（ナオ）の香を受けて棚田の稲を刈る　ゑ
良寛堂へ回る散策　美
鑑定に弄ばれし家宝あり　玲
熊の毛皮を賭けて振る骰子　悟
白寿翁自ら配る祝餅　同
前歯でしゃぶる焼鳥の骨　玲
ジェット機はケープタウンを横切りぬ　代

BGMはシバの女王　達
夏痩せていちづに人に溺れゆき　嫋
竹の皮脱ぐ生娘の艶　玲
京訛軽くまじへて転校生　ゑ
ロードマップに朱筆加へる　美
庭石の色さまざまに月今宵　代
政界といふすさまじきもの　悟
流（ナウ）れくる有線の曲身に入みて　敬
玉突きのキュー修理ひとすぢ　達
千年を耐へし檜の柱あり　悟
そよろそよろと草はなびける　嫋
薬屋は屯田兵の裔とかや　達
決別の賦を綴る麗か　玲
トテ馬車の馬が耳振る花の駅　路
甍を越えるてふてふの群　美

※ベレッタ銃＝護身用の小型拳銃

平成九年五月十九日　首尾
於　塩原温泉ホテル

風もちて　橘　文子　捌

風もちて旅に誘ふ新樹かな　橘　文子
　リボン明るく巻きし夏帽　岩井　啓子
水球の歓声遠く聞こゆらん　佐々木有子
　半熟卵殻を剝きつつ　浅賀　淑代
御常連向う三軒両隣　今宮　水壺
　回収しない雑誌古本　椿　紀子
巡視船月を東に舵を切り　五味　蓉子
　卓上に置く空の虫籠　紀
知恵の輪を放っぽり出してそぞろ寒　壺
　山駈けの行競ふ修験者　紀
盃は小さい方がお好みで　啓
　アマンの顔を描きし付け爪　有
君が弾き僕が歌ったジャズナンバー　啓
　独英辞典表紙擦り切れ　蓉
戦跡に医業引き継ぐ国境　代
　遠吠を聞く月凍つる刻　有
炉辺の子に竈お化けの話する　啓
　やめられないのポテトチップス　代
ＦＡＸの受信のランプ点滅し　蓉
　ざわめく気配啓蟄の穴　紀
爛漫の花を背にして斜に構へ　有
　角筈の角春闘の列　紀
二オテント張空中ブランコリハーサル　蓉
　自販おみくじ二度も末吉　啓
届きたる宿泊予約確認書　代
　ジパング倶楽部ともどもに入り　啓
金鉱の噂は遂にいかさまか　紀
　やっこらさあとどぜう汁吸ふ　壺
横綱に土が付いたと五月場所　代
　御手を振りつつ殿下おひろひ　同
符丁もどき暗号もどき恋の文　蓉

いちげんさんもあんさんは別　蓉
女子大生騙すことだけ巧くなる　有
眠気覚ましにシャブやマリファナ　紀
更待の雷を伴ふ予報にて　代
城に小鳥の渡り来る頃　紀
徳利ごと捧げて修す鬼貫忌　同
旦那は右に若は左に　壺
役満のロン牌を指し肩ゆるめ　同
ベッドを降りて顔洗ふ猫　紀
接吻の世界記録に挑戦し　蓉
種蒔時を日がなぼんやり　紀
朧月イワンの馬鹿の祈る丘　有
清明節に靴を買ひ換へ　壺
折り込みのちらしで作る屑の箱　代
浅葱群青お納戸の色　有
挨拶の腰の低さの親譲り　蓉
嬉しかこつば言はんではいよ　壺
帰り花故郷に開くラーメン屋　有
ちょいとよろけてすする鼻水　代
寒声の途切れざること縷のごとし　有
クリーンヒットかっ飛ばしたり　壺
○と×夫婦といへど賭は賭　蓉
裸体を隠すだまし絵を置く　啓
陽の下にバイオトマトのたわわなる　紀
ドリンク剤飲み頑張りませう　有
伝道書師の名の隣我名在り　壺
明らかにして雅なる白鬚　代
月の沖巨き鯨の悠々と　紀
ポエニ戦役終結の年　同
自ずから是々非々も無き暮し向き　蓉
居眠り続け眼鏡外れる　有
文庫本十二単の咲く中に　啓
祠にひそと坐せる捨雛　紀
青海苔の香のおむすびを頬張って　蓉
アルバイトにも民法の論　紀
ひらめきで成功譚のヒーローに　壺

米国製の大洗濯機　代
互助会が葬の形を問うて来し　同
添はれぬひとの美しき骨　紀
六条の御息所は御簾の中　蓉
苛々族の増える渋滞　代
危ふしや伸び限りしゴム鍵ホック　有
主凹ます老お手伝ひ　紀
偷盗の秘蔵の酒を盗み呑み　代
だいこ洗ひの好きな仙人　蓉
花道で大見得切って拍手浴び　同
地下街出ればついたちの月　啓
柘榴(ナオ)捥ぎ嬰を懐に鬼子母神　蓉
冷まじきもの借金の高　壺
ぼた山と別れ炭鉱後にする　蓉
選ばれてなる島の酋長　啓
ストラデバリ・ファーストクラスに置かれをり　有
紀州鉄道お終ひの駅　代
憎き口一夜明くればいとほしく　啓

汝が掌の中に溶けし寒紅　紀
狼と呼ばるる男黒き影　啓
門限のある調理士の寮　紀
三分の二まで酔うたか赤ワイン　同
クイズの答CMを待ち　蓉
手枕の月に眠たき簟　壺
螢がこぼす夢の儚さ　代
貼(ウ)り紙も継ぎ紙もして半生記　紀
安政期には苗氏帯刀　代
人権と報道の自由天秤に　有
不意に開いた嵌め殺し窓　蓉
コンピューター、チェスチャンピオン打ち負かし　啓
入学の児の傘をくるくる　有
塩原の温泉に遊べば花吹雪　文
トテ馬車のゆく土手のうららか　代

平成九年五月十九日　首尾
於　塩原温泉ホテル

あとがき

作品集Ⅷをお届けいたします。

この度は彼岸の入り前日のひと日、梅田利子・久保田庸子・桑原美津・椿紀子・長崎和代・八代嫋・吉村ゑみこの諸氏に校正のお手伝いを頂きましたこと深謝いたします。

また、原稿の取り纒めと発送の労をお引き受けの梅田利子氏に、重ねて御礼申し上げます。

下鉢清子

猫蓑作品集 Ⅷ

平成十年四月吉日 発行

発行人 東 明 雅

発行所 猫 蓑 会

定価 一、八〇〇円(送料実費)

印刷所 株式会社 岩田印刷